

Title	計量と歴史記述：イブン・アジャミーに関する基礎的考察（一）
Sub Title	Weighing and historical description : notes on Ibn al-'Ajamī (I)
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.1(1)- 54(54)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

計量と歴史記述

——イブン・アジャミーに関する基礎的考察（一）——

長谷部 史 彦

はじめに

エアフルト大学ゴータ研究図書館は、ザクセン＝ゴータ＝アルテンブルク公の居城であった巨大なバロック建築のフリーデンシュタイン城の一角に位置する。同図書館所蔵の二つのアラビア語稿本、『諸時代の事件についての同胞たちの喜悅と友人たちの平路 *Mubāhij al-ikhwān wa munāhij al-khilāf fī ḥawādith al-duhur wa al-azman*』(以下、『マバーヒジュ』と略記)と『オスマン家の歴史 *Tarih Al 'Uthman*』という書名を付されているその統篇⁽²⁾(以下、『マバーヒジュ統篇』と略記)は、オスマン朝エジプト州の一六世紀末から一七世紀初頭に至る動乱転換期に関する未活用の重要史料である。それらは、同公国の啓蒙君主エミール・レオポルト・ア

ウグスト(在位一八〇四—一八二二)の支援を得た、オリエンタリストの科学者ウルリッヒ・ヤスパール・ゼーツェン(一七六七—一八一二)が九年に及ぶ中東旅行で蒐集したマニュスク립ト群に属し、彼が一八〇七年から一八〇九年にかけてのカイロ滞在で入手した史書である⁽³⁾。

本論文は、この正統二篇の史書の著者イブン・アジャミーが如何なる人物であったのかという問いに答えようとするものである。オスマン朝期(一五一七—一七九八)カイロの市井人であったこの歴史家に関する情報は、管見の限り同時代の名士伝記集などの叙述史料に見出せず、また先行研究もブロックルマンとゼツギンによるごく簡単な書誌学的言及のみである⁽⁴⁾。こうしたなか現時点においては、掛け替えない情報源である両史料に内包された、著者自身に関する記事の内容分析・検討こそが

まず取り組むべき課題といえよう。

著者は『マバーヒジュ』を攷筆するに当たり、自らを「アフマディーで参詣者のイブン・アジャミーとして知られるシハーブッディーン・アフマド・ブン・アフマド・ブン・アブドゥッラフマーン Shihāb al-Dīn Ahmad ibn Ahmad ibn 'Abd al-Rahmān al-shahīr bi-Ibn al-'Ajamī al-zāir al-Ahmadi」と記している⁽⁵⁾。「アフマディー」は、アフマディー系のスーフイー、つまりエジプトの代表的なムスリム聖者のアフマド・バダウイー（一二七六歿）を始祖とする柔構造のスーフイー教団、アフマディーヤに属していたことを、そして、「参詣者」は、カイロの南・東縁部に広がるカラファ墓地の参詣励行者であったことを示している⁽⁶⁾。こうしたイブン・アジャミーという人物の宗教的な側面についても両史料は多量の情報を供するが、ここではまず両史料の概要をまとめ、その史料的な性格について論じたい。 (1) 家族、 (2) 居住・勤務地としての河港ブーラク、 (3) 生業としての計量活動の三点に照準を定め、この知られざる歴史記述者の人物像の解明に努めたい。

1. 『マバーヒジュ』の概要と史料的性格

オスマン朝期エジプトのアラビア語年代記に関しては、『イブン・イヤース（一五二四頃歿）を最後に途絶えた中世の豊かなアラビア語年代記の伝統を、ジャバルテイー（一八二五歿）が復活させた」といった言説が嘗ては支配的であった。しかし一九七〇年代後半以降、当該期の州都カイロで書かれたアラビア語年代記史料の校訂・出版・研究が徐々に進み、このような見方は修正を余儀なくされ⁽⁷⁾、特に一八世紀を中心にヒストリオグラフィの研究が段々に深められてきた⁽⁸⁾。

そして、『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』が書かれた一七世紀前半エジプトにおけるアラビア語史書の書き手については、M・ウインターが、マルイー・ブン・ユースフ・カルミー（一六二四頃歿）、ブルツルスイー、ガムリーなどに言及しつつ、年代記作者のイスハーキー（一六五〇頃歿）とバクリー（一六七七歿）を「当該期の二人の注目すべき歴史家」と評し、なかでもバクリーの重要性を強調している⁽⁹⁾。

三〇八葉から成る『マバーヒジュ』は、①写字生に關する記載が無いこと、②本文の筆跡と注を付しての欄外

追記の筆跡が同一であること、③日付や価格などの情報を後で書き入れようとして空欄のままとなっている箇所が少なからずあることなどから、著者イブン・アジャミーの自筆稿本であるとみてよからう。また、「私はこの年（一〇一三年／一六〇四―一六〇五年）の穀物や商品などの価格を記録したのだが、その草稿（*musaw-wada*）は失われてしまった。」といったかたちで、手控えの「草稿」の存在が度々言及されている。当該稿本はそうした覚え書きの「草稿」を基にまとめ上げられた「清書」ということになるが、実際には未整理という印象を読み手に抱かせる仕上がりといわざるを得ない。

『マバーヒジュ』には章立てが明示されていない。見出しや記述内容を考慮してここでその仮設を試みれば、⁽¹⁾序、⁽²⁾スルタン・セリム一世のエジプト征服とエジプト州総督たちの治績、⁽³⁾ナイル川の増水情報など、⁽⁴⁾カイロの著名な聖者たち（*awliya*）の死亡記事、⁽⁵⁾著者が知己を得た偉大なシャイフたち（*mashāyikh*）の伝記、⁽⁶⁾ヒジュラ暦一〇〇六年第七月二二日／一五九八年二月一八日から一〇一六年第二二月二九日／一六〇八年四月一五日に至るカイロの諸事件（*ḥawāḍith bi-al-Qahira*）、⁽⁷⁾跋という構成になる。こ

のうち（六）の分量が全体の約八二%を占めているので、本史料の基本的性格は「カイロの都市年代記」としてよいだろう。しかし、年代記以外の諸部分にも他の史料からは得られない重要情報が包含されている。それらを摘記して若干の検討を加えながら、本史書の全体を俯瞰することにした。

（一）についていえば、現存稿本の第一葉冒頭の文章は中途から始まっており、最初の一葉が欠落しているとみられる。しかし、幸いにも序の残存部分には、『マバーヒジュ』の執筆に当たって著者の基本姿勢を示した、以下のような注目すべき記述がある。

私はそこにおいて、美点（*mahasin*）と過誤（*ʿuyūb*）を記すことを自らに課した。私の後でそれについて考えた人が読み、過誤の持主たちの行為を察した際には、彼（読者）が彼ら（過誤の持主たち）に対するアッラーの御宥恕を求めますように。そして、もし彼らに過誤があったとすれば、彼らがアッラーへと帰還し、悔悟しますように。ハーフィズのイマームであるスューティー al-Jalāl al-Sayūnī は―至高なるアッラーが彼を嘉しますように―嘗てハナフィー学派のシャイフのサハーウイー Abū al

Hasan 'Ali al-Sakhawi がまとめ上げ、『輝く光』と名付けた史書に記したことについて、彼に反論した。というのも、サハーウィがそこにおいて人々の美点 (mahasin) と欠点 (masawi) を記述したからである。私はそれを読んでいないが、彼 (スューティー) が著し、*al-Kawī 'alā al-Sakhawī* と名付けたマカーマ (maqāma、技巧的押印散文) が私にそうしたことを知らしめたのである。そこにおいて彼 (スューティー) は、私が言及を避けるような酷く不快な言葉を数多く述べ、さらに、その史書を読むことを法的に認めないとまで記したが、私は彼の主張に同意しない。そして、偉大なる学者たちやカーディー・アスカルたちなどがこの史書 (『輝く光』) の記録に注意を払い、複数の写本がルーム地域に達したのである。私、彼ら二人 (スューティーとサハーウィー)、そしてイスラーム教徒たちに対して、アッラーが失敗や過誤を全て御宥恕下さいますように。⁽¹⁸⁾

ヒジュラ暦九世紀の名士たちに関する浩瀚な伝記集である『輝く光』の中で、サハーウィー (一四九七歿) は、彼が取り上げた人物たち、とりわけ学者たちに対して時

に遠慮なく批判的に記述した。⁽¹⁹⁾ 他方、スューティー (一五〇五歿) によるこの論駁の書は、E・M・サートウンの研究によれば、自らの学問、他者への攻撃性、ムジュタヒドの自任、作品の剽窃などの諸点について、サハーウィーに『輝く光』で事細かに批判されたスューティーが反駁を試みた小著である。⁽²⁰⁾ 同書においてスューティーは、剽窃疑惑に具体的に反論し、むしろサハーウィーこそがハディース学関連の著作の多くでその師イブン・ハジャルの遺稿に頼っていると指摘し、さらには、広く流布している自らの作品群と異なりサハーウィーの著作はその自宅すら出ていないと揶揄するなど、激しく応戦している。⁽²¹⁾

興味深いことにイブン・アジャミーは、自ら書くことの無かったサハーウィーの当該伝記集の記述内容に関するスューティーの論駁書を読み、そこで論難されているサハーウィーではなくスューティーの方に違和感を持ち、これを表明している。そして、『マバーヒジュ』という史書の著述方針について、サハーウィーと同様に、記述対象の人々の美点だけでなく過誤についても記すと宣言している。実際、『マバーヒジュ』とその続篇には、人物や出来事に関する忌憚のない論評、政治・軍事・社会

経済の実状に関する批判的視点からの記事が各所に織り込まれている。臆せず過誤を剔抉するこうした著者の筆致が、対象時期の多様な諸問題を焙り出してくれるのである。そして右の引用文の後尾では、スューティーの過誤を指摘したサハーウィーも、サハーウィーの過誤を指摘したスューティーも、そして著者イブン・アジャミーも、人は誰も何らかの過ちを犯すのであり、無謬の存在は唯一神のみであることが確認されている。

以上のように、イブン・アジャミーは『マバーヒジュ』の巻首において自らの見解の相対化を図りつつ、これから展開する記述にも錯誤が有り得るという謙虚な構えを示している。或いは、自由に意見を表明するために予防線を張っているといえるかもしれない。さらに、この序においても一つ注視すべきは、そこに記されている本史書の題名である。本文には「同胞たちの喜悦」⁽²²⁾のみが示され、それに続く部分は欄外に追記されている。稿本執筆の開始時点においては、題名が未確定であったのかもしれない。

(二)では、歴代エジプト州総督の治績の記事に先立ち、オスマン朝スルタンのセリム一世 Salīm ibn ʿUthmān (在位一五二二—一五二〇)とスレイマン一世 Sulay-

man ibn Salīm Shah (在位一五二〇—一五六六)についての短い記述がある。⁽²³⁾イブン・アジャミーは、セリム一世のエジプト征服に関して、

我らの主人、最も偉大なるスルタン、最も高貴なるハーカンのセリム Salīm ibn ʿUthmān —アッラーが彼を嘉しますように—のエジプトへの、そしてローダ島とナイロメーター (miḍyās) への入場に関する記述。そしてそれは、「ヒジュラ暦」九二二年度の神聖なるアッラーの月であるムハッラム月の一日、木曜日のことであつた。⁽²⁴⁾

と記している。フスタート近くの中洲ローダ島の南端に位置する、ナイル水位計測施設に特別な関心を抱いていた著者ならではの書き方であり注目に値するが、ナイロメーターをめぐる諸問題については別の機会にまとめて論じることにした。⁽²⁵⁾

続いて、マムルーク朝からオスマン朝への支配王朝の移行に関して、イブン・アジャミーの父からの興味深い伝聞情報が記されている。それは、ガウリー (在位一五〇一—一五一六)の政権の消滅が、このマムルーク朝スルタンの聖者 (ʿarif bi-Allāh) シャーリナー Abū al-Sūd al-Jarīnī に対する非難の態度に起因し、他方、セリム一

初頭のエジプト州総督

建造物 (ma'āthir)	典拠： <i>Mabāhij al-ikhwān</i> ,
学院・墓廟・貯水槽(タッバーナ地区)	fol. 2
	fol. 2v
	fol. 2v
	fol. 2v
	fols. 2v-3r
ブーラクのモスク・亜麻商館など4つの商館・初等学校、3つの給水所、カウスン・モスク街区の修道場など	fol. 3r
バイナルカスラインの初等学校・貯水槽、シャーフィイー廟への道路の壁	fol. 3
	fols. 3v-4r
モカッタム山のモスク	fols. 3v-4v
	fols. 4v-5r.
	fol. 5
サアード門街区のモスク・修道場、ナッハースイーン市場の初等学校・貯水槽、ブーラクの商館・2つのラブウ	fols. 5v-6v
ルーク地区のモスク、ハンマーム小市場街区の小麦市場の学院、マクスの孤児の初等学校	fols. 6v-7r
ルマイラの自らの墓廟、ブーラクの製糖所、カナーティル・ムナッジャヤーの館・庭園	fol. 7
カイロやその他の複数のモスク・学院・修道場・商館など	fols. 7v-10v
	fol. 11r
	fol. 11r
	fol. 11r
カラーファの自らの墓廟・孤児の初等学校・貯水槽・修道場のミナレット	fol. 11
ブーラクの初等学校・給水所・米商館・店舗・ラブウ・公衆浴場	fols. 11v-13v
	fol. 13v
アズハル地区の学院・孤児の初等学校	fols. 13v-14r
	fols. 14r-15v

表 1 16 世紀 -17 世紀

No.	在任者名	在任期間(ヒジュラ暦 / 西暦)
1	チェルケス・ハユル・ベイ Khāyirbak Malik al-Umarā'	923 年第 11 月 15 日～928 年第 11 月 27 日 / 1517 年 11 月 29 日～1522 年 10 月 18 日
2	チョバン・ムスタファ・バシヤ Muṣṭafā Bāshā	928 年第 12 月 26 日～929 年第 10 月 17 日 / 1522 年 11 月 16 日～1523 年 8 月 29 日
3	ハーイン・アフメト・バシヤ Aḥmad Bāshā al-Maqtūl	929 年第 10 月 18 日～930 年第 4 月 27 日 / 1523 年 8 月 30 日～1524 年 3 月 4 日
4	ギュゼルジェ・カスウム・バシヤ Qāsim Bāshā	?～932 年 /
5	サドラザム・イブラヒム・バシヤ Ibrāhīm Bāshā	932 年第 6 月 7 日～第 8 月 22 日 / 1526 年 3 月 21 日～6 月 3 日
6	ハドゥム・スレイマン・バシヤ Sulaymān Bāshā ①	932 年第 8 月 28 日～941 年第 8 月 17 日 / 1526 年 6 月 9 日～1535 年 2 月 21 日
7	ヒュスレヴ・バシヤ Khusraf Bāshā	941 年第 8 月 21 日～943 年第 6 月 26 日 / 1535 年 2 月 25 日～1536 年 12 月 10 日
8	ハドゥム・スレイマン・バシヤ Sulaymān Bāshā ②	943 年第 7 月 21 日～945 年第 1 月 11 日 / 1537 年 1 月 3 日～1538 年 6 月 9 日
9	ダヴト・バシヤ Dawūd Bāshā	945 年第 1 月 27 日～956 年第 3 月 13 日 / 1538 年 6 月 25 日～1549 年 4 月 11 日
10	セミン・アリー・バシヤ 'Ali Bāshā	956 年第 8 月 10 日～961 年第 1 月 30 日 / 1549 年 9 月 3 日～1554 年 1 月 5 日
11	ドッカギンザーデ・メフメト・バシヤ Muḥammad Bāshā	961 年第 2 月 1 日～963 年第 4 月 20 日 / 1554 年 1 月 6 日～1556 年 3 月 3 日
12	イスケンデル・バシヤ Iskandar Bāshā	963 年第 4 月 21 日～966 年第 7 月 30 日 / 1556 年 3 月 4 日～1559 年 5 月 8 日
13	ハドゥム・アリー・バシヤ 'Ali Bāshā	966 年第 8 月 1 日～967 年第 12 月 23 日 / 1559 年 5 月 9 日～1560 年 9 月 14 日
14	マフムト・バシヤ Maḥmūd Bāshā	973 年第 10 月 1 日～975 年第 5 月 24 日 / 1566 年 4 月 21 日～1567 年 11 月 26 日
15	コジャ・スイナン・バシヤ Sinān Bāshā ①	975 年第 8 月 24 日～976 年第 6 月 13 日 / 1568 年 2 月 24 日～12 月 3 日
16	チェルケス・イスケンデル・バシヤ Iskandar Bāshā Jarkas	976 年第 6 月 21 日～979 年第 1 月 30 日 / 1568 年 12 月 11 日～1571 年 6 月 24 日
17	コジャ・スイナン・バシヤ Sinān Bāshā ②	979 年第 2 月 1 日～980 年第 12 月 29 日 / 1571 年 6 月 25 日～1573 年 5 月 2 日
18	ボドゥル・ヒュセイン・バシヤ Husayn Bāshā	981 年第 1 月 1 日～982 年第 9 月 30 日 / 1573 年 5 月 3 日～1575 年 1 月 13 日
19	メスイフ・スレイマン・バシヤ Masīḥ Bāshā	982 年第 10 月 1 日～? /1575 年 1 月 14 日～?
20	ハドゥム・ハサン・バシヤ Hasan Bāshā al-Tawāshi	988 年第 5 月 16 日～991 年第 4 月 13 日 / 1580 年 6 月 29 日～1583 年 5 月 6 日
21	ダマド・イブラヒム・バシヤ Ibrāhīm Bāshā al-Wazīr	991 年第 4 月 24 日～992 年第 10 月 12 日 / 1583 年 5 月 17 日～1584 年 10 月 17 日
22	デフテルダール・スイナン・バシヤ Sinān Bāshā Daftardār	992 年第 10 月 13 日～994 年第 4 月 27 日 / 1584 年 10 月 18 日～1586 年 4 月 17 日
23	ユヴェイス・バシヤ Uways Bāshā	994 年第 6 月 28 日～999 年第 7 月 18 日 / 1586 年 6 月 16 日～1591 年 5 月 12 日

ズワイラ門外の商館・店舗、ブーラークの2つの商館と諸店舗	fols. 15v-17r
	fol. 17
カラーファなどの シャリーフたちや聖者たちの墓廟、イブン・トゥールーン・モスクの修復	fols. 17v-21v
	fos. 21v-22r
小カラーファの礼拝所と貯水槽	fols. 22r-24v
	fols. 24v-25v
	fols. 134r, 145
	fol. 25v
	fol. 25v
	fol. 26r
ハッジ巡礼の貧者たちの天幕(sahāba)、ロゼッタ港の商館、ラブウと諸店舗	fols. 26r-28r
アフリカハネガヤ・タロイモ市場の商館・ラブウ・諸店舗	fols. 28r-29r
	fol. 29r

合性を考慮して修正した。

世はエジプト征服直後にこの聖者を容認する姿勢を示した、という指摘である。⁽²⁶⁾ 支配王朝の交代に関するエジプト社会の得心の仕方を窺わせる記事といえよう。イブン・アジャミーが列記した歴代のエジプト州総督とその任期及び建造物は、表1のとおりである。⁽²⁷⁾ 本表に明らかなように、各エジプト州総督の記事については分量の多寡が顕著である。特に記述が長く数葉に亘っているのは、コジャ・スィナン・パシヤ（在任一五六八、一五七一―一五七三、No. 15、17）、ハドウム・ハサン・パシヤ（在任一五八〇―一五八三、No. 20）、ハドウム・ハーフィズ・パシヤ（在任一五九一―一五九五、No. 24）、エミール・メフメト・パシヤ（在任一九六一―一九九八、No. 26）、ヤヴズ・アリ・パシヤ（在任一六〇一―一六〇三、No. 28）、オキユズ・メフメト・パシヤ（クルクラン・メフメト・パシヤ、在任一六〇七―一六一一、No. 32）であり、そ

24	ハドゥム・ハーフィズ・バシヤ Hâfîz Ahmâd Bâshâ	999年9月18日～1003年9月25日/ 1591年7月10日～1595年6月3日
25	クルト・メフメト・バシヤ Qurt Bâshâ	1003年9月18日～1004年9月21日/ 1595年5月27日～1596年5月19日
26	エミール・メフメト・バシヤ Muḥammad Bâshâ al-Sharîf	1004年10月3日～1006年12月23日/ 1596年5月31日～1598年7月27日
27	フズル・バシヤ Khaḍîr Bâshâ	1006年12月27日～1010年第1月11日/ 1598年7月31日～1601年7月12日
28	ヤヴズ・アリー・バシヤ 'Alî Bâshâ al-Silâḥdâr	1010年2月19日～1012年4月6日/ 1601年8月19日～1603年9月13日
a	ビーリー・ベイ Bîrî Bîk	1012年4月15日～第8月25日/ 1603年9月22日～1604年1月28日
29	ハジ・イブラヒム・バシヤ	1012年12月26日～1013年4月29日/ 1604年5月23日～9月24日
b	ムスタファ・エフエンディ Muṣtafâ Afandî Qâḍî Askar	1013年5月1日～第7月17日/ 1604年9月25日～12月9日
30	ハドゥム・メフメト・バシヤ Muḥammad Bâshâ al-Tawâshî	1013年7月28日～1014年第3月1日/ 1604年12月20日～1605年7月17日
31	イエメンリ・ハサン・バシヤ Ḥasan Bâshâ	1014年第3月1日～1016年第1月25日/ 1605年7月17日～1607年5月22日
32	オキユズ・メフメト・バシヤ Muḥammad Bâshâ Sâliḥdâr	1016年第2月7日～1020年第6月19日/ 1607年6月3日～1611年8月29日
c	ハーッジー・ベイ Ḥâjî Bîk Daftardâr	1020年第7月4日～第8月9日/ 1611年9月12日～10月17日
33	ソフ・メフメト・バシヤ Muḥammad Bâshâ Sâliḥdâr al-Thâni	1020年第7月20日～?/1611年9月28日～?

* 在任者名の日本語表記に当たっては Mehmed Süreyya, *Sicill-i Osmani*, vol. 6, Istanbul, 1996, p. 1812を参照した。

* セミン・アリー・バシヤの任期は959年第8月10日からとあるが、イブン・アジャミーが記す在任期間との整

* ハドゥム・ハーフィズ・バシヤの任期終了とクルト・メフメト・バシヤの任期開始には不整合がみられる。

* a、b、cは州総督臨時代理。

れはイブン・アジャミーがこれらの州総督とその時代をとりわけ重視していたことを示すものといえる。以下、網羅的な検討は差し控え、特に注目される記事の内容を拾い上げてみよう。

イスケンデル・パシヤ(在任一五六一一五五九、No.12)について、イブン・アジャミーは自らが得た情報を次のように記している。

彼ら(イスケンデル・パシヤが建てたワクフ対象施設の役職者たち)の中のある人がこのイスケンデル・パシヤの行状について私に伝えたところでは、彼は、地方監察官たち(kushshâf)、徴税官たち('ummal)、カイロやその他の徴税請負人たちから賄賂(rashwa)を得ることに自らの手を広げた最初の人物であった。彼が至高なるアッラーの方へと向かいますように。それ以来、当時から現在に至るまで、そうしたことはエ

ジプトのパシャたちの特徴となった。そして、それは彼らの用語で受任奉仕料 (maṭn khidmat al-tawḥīd) と呼ばれるようになった。⁽²⁸⁾

つまり、任命権者の立場を悪用した収賄に初めて手を染めたエジプト州総督がこのパシャであり、以後こうしたやり方が慣例化したとの指摘である。この記述は、一六世紀後半から一七世紀初頭に至る時期のエジプト州総督の汚職傾向について明言している点で重要である。

次に、マフムト・パシャ（在任一五六六—一五六七、No. 14）については、その任期中の九七五年五月二四日／一五六七年一月二六日に発生した暗殺事件に関する説明が注目される。⁽²⁹⁾ 殺害理由に関しては「軍の有力者たち (akābir al-askar) の一部による画策」という具体性に欠ける表現に止まっているが、殺害場所については「クルクマース Qulqmas とサルルジー al-Sarrūj」として知られる農地に面したダウラト・バーイ・カルムート Dawlat Bay Qarnūt として知られるマドラサの近く」と特定され、さらにイブン・アジャミーが父から得た情報として、この農地の景観や産物に関する注記も欄外に示されている。また、襲撃されたマフムト・パシャは木製の台車でカイロ城へと運ばれたが、到着後間もなく死

亡し、その日は半日間カイロの諸市場が閉まり、安全保障の布告の後に再開したとしている。そして、その遺骸は、マフムト・パシャがルマイラ広場のカーニー・ベク学院 Madrasat Qanī Bēk の隣に予め用意していた「墓 (madfna)」に埋葬されたと述べられている。これはマフムト・パシャ・モスクに附設された墓廟を指すと考えられるが、イブン・アジャミーは、ルマイラ広場（現サラフッディーン広場）に現存する、マムルーク朝様式を色濃く示すこのモスクには言及していない。⁽³⁰⁾

ハドウム・ハサン・パシャ（在任一五八〇—一五八三、No. 20）をめぐるのは、この州総督がブーラクに残した建造物に関する詳述がみられるが、そこで注目すべきは、それに先立つ次のような記述である。

彼（ハドウム・ハサン・パシャ）は恰幅が良く、長身の優美な容姿で、顔が美しく、畏怖の念を抱かせるが、彼を目にする人が宦官とは気付かないような外見をしていた。なぜならば、宦官たちは顔に皺が寄っていたが、彼にはそのようなことが全くなかったからである。そして、ナイル川の計測を任せられたイブン・アブー・アッ＝ラッダードの子孫 (awlād ibn Abī al-Raddād) のある人物が私に伝え

たように、エジプトを統治したパシャたちの中で彼より卓越した者はいなかった。彼ら（イブン・アブー・アッ＝ラッダードの子孫）は、エジプトを委ねられて統治した全てのパシャたちについて熟知していた。それは、増水期に州総督府へと毎日登城してパシャたちに増水について報告し、満水の日に「ナイロメーターで」香り付けを行なう際に慈善の施しを受けるのが、彼らイブン・アブー・アッ＝ラッダードの子孫の慣行だったからである。⁽³²⁾

九世紀中葉以来、王朝の交代に関わりなくナイル水位計測官の重職を専有し続けてきたアブー・アッ＝ラッダード家は、歴代州総督と面会の機会をもつ特別な立場にあるカイロの名家であった。⁽³³⁾ 右の記述は、こうした筋からの信頼度の高い情報として、この州総督の容貌や人物評価を示したものと見えよう。また、イブン・アジャミーとこの特殊名家の成員が知己の間柄であったことにも意を留めておきたい。

ユヴェイス・パシヤ（任期一五八六—一五九一、No.23）に関して、イブン・アジャミーは、「彼の任期にはエジプトで軍隊（askar）の起こした最大の内乱（*fitna al-uzma*）があり、それはこの時期に彼らが起こ

した最初の内乱でもあった」と述べる。そして、「軍隊」の内実を詳らかにしていないが、内乱の背景や展開についてかなり細かな記述を残している。それによれば、「軍隊」は「アラブの子たち（*awlād al-'Arab*）」つまりエジプト人たちの中の有力者たち（*akābir*）に羨望の思いを抱いていた。それは、彼らが村々の徴税を請け負って耕作者たちから富を獲得し、マムルークたちを保有していたからであったという。⁽³⁴⁾ こうした有力者として当時著名だったのがカーデイーのアリー・ミスィーリー Nur al-Dīn Abū al-Hasan 'Alī al-Khaṭīb al-Misrī であり、彼はイブン・カーク Ibn al-Qāq という通称で知られていた。イブン・カークがカイロで有名になり、その財産とマムルークたちや従者たち（*atba'*）が増加すると、「ルーム人たち（*Arwām*）」すなわち「軍隊」は彼を羨むようになり、結集し、イブン・カークがアミールのスライマーン Sulaymān（通称 Ibn Subhā）の遺産から購入して得たエズベキーヤ街区 Khutī al-Azbakiyya al-'Azbakiyya の居宅を襲い、略奪を働き、女たちに罵詈雑言を浴びせた。そしてイブン・カークを殺害して首を刎ねると、これをルマイラ広場まで運び、ハサン学院の下にあったエジプトイチジク（*jummayz*）の木に吊る

(35) した。また、同様の襲撃の対象となったのが、やはりカーデーであったシャムスッディーン・ムハンマド Shams al-Din Abū 'Abd Allāh Muhammad³⁵ 通称イブン・ザフラク Ibn Zāḥlaq³⁶ であり、彼の首級もイブン・カークの隣に吊るされた。イブン・ザフラクは、両聖地ワクフ (awqāf al-Haramayn al-sharīfayn) の現場管理人 (mubāshir) を務めたエジプトの名士 (ayyān) の一人であった。⁽³⁶⁾ この騒乱はエジプトの地方へも拡大し、イスタンブルのスルタン・ムラト三世にもその報が届いた。「軍隊」はさらにユヴェイス・パシャの息子の殺害も企図していたが、これは実現には至らなかった。⁽³⁷⁾

以上は、エジプトの正規軍の一部による最初の大規模反乱について伝えた重要記事である。そこでの攻撃の矛先は州総督ではなく、財力のある二人のカーデーへと向けられ、州総督の息子も一時危険に晒されることとなったのである。カーデーたちがカイロの何れのイスラーム法廷に関わっていたのかは不明であるが、一六世紀末に財を蓄えたカイロのウラマー名士がマムルークを多数保有するに至っていたという点は刮目に値しよう。⁽³⁸⁾

次のハドウム・ハーフィズ・パシャ (在任一五九一―一五九五、No 24) については、カイロのムフタスイブ

(公益市場監督官、muhtasib al-Qāhira) 及びエジプトの徴税諸項目の徴税請負人 (mulāzim bi-jināt min al-muqāṭāt al-Misriyya) であつたムラーズ Murād³⁹ 通称イブン・スッカリー Ibn al-Sukkārī に対する寵遇、そして両者の親密な関係を中心に記述されている。このパシャに「我が子」と呼ばれていたイブン・スッカリーは、自宅で作った菓子を毎日この州総督に献上し、イブン・アジャミーの得た情報では、その一回分が一〇〇〇ニスフに相当した。これがアミールたち (umara') や有力者たち (akābir) の嫉妬を買い、殺害を懼れたイブン・スッカリーはイスタンブルに逃れ、長らく留まったが、そこでのムフタスイブ職就任をめぐつて嘆願 (naḥayya) がなされたため、エジプトへと帰還することとなった。しかし間もなく再びイスタンブルに行き、そこで死去したという。⁽³⁹⁾ 後述のとおり『マバーヒジュ続篇』で詳しく記されているように、州総督と公益市場監督官の癒着の弊害は、イブン・アジャミーが特段に問題視するところであり、そうした点を踏まえてこの記事を解すべきであろう。

エミール・メフメト・パシャ (在任一五九六―一五九八、No 26) については、「我らが主人、サイイド、シャ

リーフ、高貴な生まれの人 (hasib)、高貴な血筋の人 (nasib)、純粋な木の分枝 (far' al-shajara al-zakiyya)、ハーシム家の帯の刺繍飾り (tiraz al-iḥāba al-Ḥashimīyya)」といった、他の州総督たちについてはみられない充実した尊称が記され、預言者ムハンマドの血統保持者であったことが強調されている。また、「彼はその任期にエジプトに卓越した善行 (khayrāt ḥisān) の効果を及ぼし、貧者たちや困窮者たちにサダカ (任意の喜捨) を行なった」と記し、表1に示したような宗教施設に関わる事業が列挙されている。⁽⁴¹⁾そしてイブン・アジャミーは、このパシヤがブーラークを訪れた際に「金言 (ilkam) と礼儀作法 (ādāb)」を内容とする自著を献呈し、銀貨四〇ニスフ相当を「小型銀貨 (ḥiddat al-qurūsh al-sighar)」で下賜されたが、ブーラークの人々はこれを二〇デイナーと誤解して噂したとしている。⁽⁴²⁾シャリーフとしての崇敬に加えて、こうした個人的接触を体験したこともあって、この州総督については、その任期中に起きた大乱 (fitna 'azīma) の情報も含めた長い記事を残したものと思われる。⁽⁴³⁾

そして、任期中に殺害されたハジ・イブラヒム・パシヤ (在任一六〇四、No. 29) に関する記事はこの部分に見

当たらず、(六) の年代記において確認される。他方、州総督の臨時代理職 (niyāba) を担った官人たちについても彩り豊かな記述がみられる。例えば、「エジプトのベイの名士たち (a'yan sanā'iq Miṣr)」の一人、ピーリー・ベイ Biri Bik (在任一六〇三—一六〇四、a) は色白の肥満体であったが、ハッジ巡礼のマフミル長官 (amir 'alā al-mahmil al-sharīf) を複数年に亘って務め、当時はまだ法学論争の的とされていたコーヒーを一切口にせず、カイロ南縁の預言者聖遺物廟 al-'Aṭṭā al-Nabawiyya への参詣を繰り返し実践するなど、篤信の人物として知られていたという。⁽⁴⁴⁾また、財務長官であったハーッジー・ベイ Hajī Bik (在任一六一—c) は、サリーバ al-Salba al-Tūniyya 近くのダルブ・アル＝バーバー街区 Khut Darb al-Bābā の自宅から登城して職務に当たったが、「頑固な庄政者であったためにエジプトの人々に嫌われ、その通貨政策は損害を齎したと記されている」。⁽⁴⁵⁾

イブン・アジャミーは、歴代の州総督及び州総督臨時代理に関する一連の記述の後尾に、小括として以下の諸点を指摘している。⁽⁴⁶⁾すなわち、「現在」までの州総督の総数は「三七名」であり、このうち同職を二期務めたの

はハドウム・スレイマン・パシヤ (No. 6、8) とコジヤ・スイナン・パシヤ (No. 15、17) であった。また、州総督の臨時代理職 (*nizaba*) を担ったのはデフテルダール・スイナン・パシヤ (No. 22⁴⁷)、ピーリー・ベイ (a)、アミール・アッ＝リワー Amir al-Iwā' のオスマン・ベイ Uthman Bik⁴⁸、そしてカーデー・アスカルのムスタファ・エフエンディ (b) の計四名であった。⁴⁹ 他方、宦官の州総督は、ハドウム・スレイマン・パシヤ (No. 6、8)、メスイフ・スレイマン・パシヤ (No. 19)、ハドウム・ハサン・パシヤ (No. 20)、ハドウム・ハーフィズ・パシヤ (No. 24)、ハドウム・メフメト・パシヤ (No. 30) の計五名であった。さらに、在任中にエジプトで死去した州総督として、「カスム・パシヤの後に任じられたイブラヒム・パシヤ」、ダウト・パシヤ (No. 9)、ハドウム・アリー・パシヤ (No. 13)、マフムト・パシヤ (No. 14)、ユヴェイス・パシヤ (No. 23)、ハジ・イブラヒム・パシヤ (No. 29) にウスマーン・ベイを加え、計七名であった。⁵⁰ なお、ハドウム・アリー・パシヤ (No. 13) の任期とマフムト・パシヤ (No. 14) の任期には五年半ほどの隔たりがみられ、バクリーの年代記には、両者の間にシャヒン・パシヤ *Musajafa Basha Shahin* (在任九六七年第一二月

七日／一五六〇年八月二十九日／九七一年第六月一日／一五六四年一月二十六日) とソフ・アリー・パシヤ *Ali Basha al-Sufi* (在任九七一年第七月一日／一五六四年二月一日／九七三年第九月三〇日／一五六六年四月二〇日) という二人の州総督の存在が確認される。⁵¹

著者による以上の小括における「現在」は、ソフ・メフメト・パシヤ (No. 33) の任期のある時点を指すように見える。『マバーヒジュ』の歴代州総督の部分で確認される最後の日付は、新任のこのパシヤが州総督府に初めて登城した一〇二〇年第七月二二日／一六一年九月三〇日である。⁵² この州総督の任期は、イスハーキーによれば一〇二〇年第八月二二日／一六一年一月三〇日から一〇二四年第三月一〇日／一六一五年四月九日までであった。⁵³ そうであるならば、この(二)の部分は『マバーヒジュ』の執筆完了の約一六年前に書かれたことになり、本史書が擱筆に至るまでには長い年月を要したと推察されるのである。

続いてイブン・アジャミーは、「エジプトを統治した州総督たちについては充分に述べたので、一年一年のナイルの増水について述べ始め」と記し、(三)のナイル川の増水情報を簡潔かつ羅列的に提示している。⁵⁴ そこ

表2 ナイル川の増水情報

ヒジュラ暦	満水到達日(ヒジュラ暦／西暦／コプト暦)	最高水位
988年	記述なし	22dh 8iș
989年	第7月24日/1581年8月24日/1297年ミスラー月21日	19dh 10iș
990年	第7月26日/1582年8月16日/1298年ミスラー月24日	19dh 22iș
991年	第7月30日/1583年8月19日/1299年ミスラー月16日	21dh 20iș
992年	第8月12日/1584年8月19日/1300年ミスラー月16日	22dh 15iș
993年	第9月4日/1585年8月30日/1301年ミスラー月27日	18dh 19iș
994年	第9月5日/1586年8月20日/1302年ミスラー月17日	20dh 20iș
995年	第9月16日/1587年8月20日/1303年ミスラー月18日	記述なし
996年	第10月1日/1588年8月24日/1304年ミスラー月21日	21dh 2iș
997年	記述なし	22dh 10iș
998年	第10月16日/1590年8月18日/1306年ミスラー月14日	19dh 1iș
999年	第11月3日/1591年8月23日/1307年ミスラー月20日	20dh 1iș
1000年	第11月11日/1592年8月19日/1308年ミスラー月16日	21dh 12iș
1001年	第11月25日/1593年8月23日/1309年ミスラー月19日	記述なし
1002年	第11月30日/1594年8月17日/1310年ミスラー月14日	21dh 3iș
1003年	第12月19日/1595年8月25日/1311年ミスラー月22日	19dh 20iș
1004年	第12月9日/1596年8月4日/1312年アビーブ月30日	22dh 10iș
1006年	第1月1日/1597年8月14日/1313年ミスラー月11日	21dh 3iș
1007年	記述なし/1598年8月23日/1314年ミスラー月20日	20dh 14iș

* 西暦は筆者が追記し、1582年10月まではユリウス暦、それ以後はグレゴリウス暦で表示した。

* dhはズイラーウ、ișはイスバウを表す。

にみられる九八八年／一五八〇年から一〇〇七年／一五九八年に至る増水情報をまとめたのが表2である。(三)の中心的部分の三〇葉目の裏、及び三一葉目の表の欄外は、左回りに配置された著者自身の手になる追記によって隙間なく埋め尽くされた状態となっている。それは、本文中に明記されているように、著者がヒジュラ暦九九二年から一〇〇五年に関する草稿(musawwada)を紛失してしまったことに起因する⁽⁵⁵⁾。つまり、この欄外追記は、欠落した増水情報に後にならかの方法で著者が入手し、書き足したものと推察されるのである。

本文及び欄外の増水情報は、①ナイロメーターの水位が一ズイラーウの満水に達してカイロのミール運河が開かれた日のヒジュラ

暦ならびにコプト暦による表示、それに②最高水位の値から成っている。そして、最高水位の値が二二ズイラー

も盛り込まれており、総じて混然とした印象を与える部分といえる。

ウハイスバウに達したヒジュラ暦九八八年、二二ズイラーウ一五イスバウの九九二年、二二ズイラーウ一〇イスバウの九九七年については「偉大なナイル (al-'azim)」、一八ズイラーウ一九イスバウに終わった九九三年については「低劣なナイル (al-nihās)」という表現がみられる。ただし、二二ズイラーウ一〇イスバウに達した一〇〇四年については、「偉大なナイル」と記されていない。そして、ヒジュラ暦一〇〇七年のナイル情報⁽⁵⁵⁾の提示に続いて、「私は一〇〇八年の増水の草稿 (mu-sawwada) を紛失した」との記述もある。先の (二) の執筆年代の推定からすれば、ヒジュラ暦一〇二〇年の夏季までの増水情報がこゝで示されていてもよいのであるが、そうでないのはこの草稿紛失が一因であったとも考えられる。或いは、著者は年代記部分で言及すればよいと考えていたのかもしれない。なお、(三) にはナイル情報以外に、後述するイブン・アジャミーとその家族に関する重要記事⁽⁵⁷⁾、一〇〇七年から一〇〇九年に至る時期を対象とした名士たち (ayān) の死亡記事、カイロの皮鞆工房 (madabigh) に関する記事などの重要情報

(四) は黒字の大書をもって始まり、「この年以前の、

カーヒラで著名な一群の聖者たち (awliyā) の死亡記事」という見出しが掲げられている。それに先立つ部分からすれば、「この年」とはヒジュラ暦一〇〇九年を指していると考えられる。取り上げられているのは、①マジズブ型聖者のアブドゥルカリム 'Abd al-Karīm al-Majdhūb (一五九〇歿)、②マールイク学派の学者ビヌーフアリー Muhammad al-Binūfārī (一五九〇歿)、③ハナフィー学派の法学者ナフリーリー (一五九〇歿)、④シャーフイー学派の法学者スンバーティー Ahmad al-Sunbātī (一五八九歿)、⑤初代正統カリフのアブー・バクルの血統保持者であり、「物語師の息子 Ibn al-Qasās」という通称で知られたムハンマド・バクリー Shams al-Dīn Muḥammad ibn Muḥammad al-Bakrī (一五八六歿)、⑥アブー・バクル・スマイニー Abū Bakr al-Sumaynī (一五九一歿)、⑦ハルワティー Abū al-Faḍl al-Khalwātī (一五九一歿) という、計七名の「生ける聖者」である。その記述内容は、著者との個人的交流の情報を含むなど細部に及び、近世ムスリム聖者研究の史

料として有用であるが、これについては次の(五)の記述内容と併せて別稿にて検討することにした。

(五)は「偉大で有力な卓越したサイイドのシャイフたちの中で私が知己を得た人」、著者の言い換えに従えば、「私のシャイフ」たちに関する記事である。彼らを列挙すれば、^(a) シャーフィイー派法学・クルアーン解釈学・ハディース学の学者で、ナクシュバンディーヤのスーフィーでもあったムハンマド・バフナスィー *Abu 'Abd Allāh Muḥammad al-Bahnasi* (ヒジュラ暦一〇世紀末⁽⁶⁶⁾歿)、^(b) 聖者バダウィーのタリールカにおける「私のシャイフたちの一人」である「両カラーフアの参詣者たちの導師 (*shaykh al-zuwwār bi-al-Qarāfatayn*)」(ヒジュラ暦一〇世紀末⁽⁶⁷⁾歿)、^(c) ナイルデルタ・シャルキーヤ県のキリムラ *Qirimla* 村の織工からシャーフィイー派法学者となった聖者 (*walī*) のムハンマド・ガムリー *Abu 'Abd Allāh Muḥammad Ḥarrāz al-Ghamrī* (一五九一⁽⁶⁸⁾歿)、^(d) シャーフィイー派法学者でアラビア語学の泰斗であったアブドウルカリーム・ドゥフミッスィー *Abū Muḥammad 'Abd al-Karīm al-Dukhmī* (歿年記載なし)、^(e) シャーフィイー派法学者のアフマド・フシャイニー *Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Ahmad al-Fushaynī* (歿年

記載なし)、^(f) シャーフィイー派法学者のサーリフ・カッターミー *'Alam al-Dīn Salīh al-Kattāmī* (歿年記載なし)、^(g) シャーフィイー派法学者で聖者 (*walī*) のムハンマド・マトブリー *Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Ahmad ibn Muḥammad al-Maṭbū'ī* (72) ^(h) カーデー・アスカル付きの通訳を父にもち、イスカンダル・パシャ・モスクの礼拝指導者であったイブン・トゥルジュマーン *Muḥammad ibn Yalyā (Ibn Turjūmān)* (一五九八⁽⁷³⁾歿)である。以上の八人は、イブン・アジャミーにとってイスラーム諸学、特にシャーフィイー派法学とアラビア語学の学師、ないしはスーフイズムの導師であった。このように(五)で取り上げられたシャイフの人数は限られているが、仔細な伝記情報を含むことから史料価値は高く、またイブン・アジャミーの学歴や人間形成について考えるうえでも軽視できない部分といえる。

カイロを中心にエジプト州の諸事件を扱った年代記の(二六)の基本的な構成は、表3のとおりである。まず指摘すべきは、最初の部分が年代記としては非秩序的であり、ヒジュラ暦一〇〇〇年から一〇〇六年に至る諸情報 が不規則に提示されているという点である。その始めには、エミール・メフメト・パシャの任期の一〇〇六年第

表3 『マバーヒジュ』の年代記の構成

ヒジュラ暦	西暦	典拠: <i>Mabāhij al-ikhwān</i> ,	葉(概数)
1000-1006 年	1591/1598 年	fols. 56v-68v.	12
1008 年	1599/1600 年	fols. 86r-90v.	4.5
1009 年	1600/1601 年	fols. 68v-71r, 84r-86r, 90v-91v.	6
1010 年	1601/1602 年	fols. 71r-84r, 91v-117v.	37.5
1011 年	1602/1603 年	fols. 117v-123r.	6
1012 年	1603/1604 年	fols. 123v-135r.	11.5
1013 年	1604/1605 年	fols. 135r-164r.	29.5
1014 年	1605/1606 年	fols. 164r-179r.	15
1015 年	1606/1607 年	fols. 179r-226v.	47
1016 年	1607/1608 年	fols. 226v-307v.	81.5

七月一二日／一五九八年二月一八日に起きた内乱⁽⁷⁴⁾、一〇〇五年第四月末頃／一五九六年一月中旬のカイロにおける戦勝祝賀の飾り付け⁽⁷⁵⁾、一〇〇五年第八月一五日／一五九七年四月三日のバヌー・ワファアーのマウリド（生誕祭）とエミール・メフメト・パシャの墓廟参詣、そしてそれに関連してこの州総督が夜間に人目を忍んでアズハル・モスクの講座に参加したこと⁽⁷⁶⁾、同じ州総督による数々の善行（*khayrat*）⁽⁷⁷⁾、といった記事が並べられている。つまり、著者の尊敬対象であったシャリーフのエミール・メフメト・パシャに関わる諸情報が示されているのである。続いて、ヒジュラ暦一〇〇一年におけるシャイフ二名の死亡記事と一〇〇三年のあるシャイフの死亡記事⁽⁷⁸⁾、一〇〇〇年第一月初旬／一五九一年一〇月下旬におけるカイロの大洪水の記述を挟んで、再びエミール・メフメト・パシャの任期中の一〇〇五年及び一〇〇六年の記事、具体的にいえば、シャイフ一名の死亡記事⁽⁸¹⁾、アミール・アッ＝リワー（*amir al-irwāʾ al-sultānī*）のスライマーン Sulaymān（通称イブン・マーマーイ・ディラーク Ibn Māmāy Dirāq）による灌漑土手の整備⁽⁸²⁾、勅令に基づくファランジュの領事の処刑⁽⁸³⁾、ディーワーン・アーリーのカーティブ・アッ＝スイッルによる割札式の開催⁽⁸⁴⁾、少年

少女によるある紛争に関する州総督への嘆願とその顛末⁽⁸⁵⁾、シャイフ一名の死亡記事⁽⁸⁶⁾、あるマリーク派カーデーの死亡記事⁽⁸⁷⁾などが示されている。

このようにエミール・メフメト・パシヤを特別視する著者の眼差しが明瞭に認められる一方で、雑多な内容を盛り込んだこの部分の後には、ヒジュラ暦一〇〇八年、一〇〇九年、一〇一〇年に関する記事が、これもやや不規則なかたちで提示されている⁽⁸⁸⁾。しかし、それに続く一〇一一年以降の各年については、「一〇一一年の諸事件の記述」のように太字で大書される形式となり、編年体形式の年代記としての整序性が明らかに高まる傾向が認められ、さらに一〇一三年から一〇一六年までについては各月がほぼ時系列順に示されている。

以上のように、(六)の年代記は読者に未完成な印象を与えるとはいえず、州都カイロを中心としたエジプトの社会・経済・政治・軍事・文化に関する情報の宝庫である。そこでは、国際的・地域的市場の動向、食料価格(一覽的表示もあり)、通貨問題、ムフタスイブ(公益市場監督官)と州都の市場行政、ナイル川の増減水、食料や生活用品をめぐる騒動、州都や地方の住民による嘆願行動、ハワージヤー(紳商)ならびにタージル(大商

人)と遠隔地交易、計量士組合などの各種同職組合、社会的危機と祈願式、ペストの流行、自然災害、スーフィズムと聖者信仰、カラーフア墓地参詣、アラブ諸部族の動静、サダカとワクフ、州総督の活動や施策、軍隊の反乱、殺人・窃盗事件、禁酒令、喫煙習慣の広まり、衣服の流行など、実に多彩な記事が充溢している。とりわけ、後で述べるブーラク地区、そしてルーク地区、カナール・アツ・スィバウ地区、カラーフア地区、さらにはナイル西岸のギザ県など、州都カイロの西部市域・南部市域など周辺域に関する多大な記述量がその特長といえるだろう。また、量的には限られているが、ナイルデルタを中心としたエジプト州の諸県、メッカとメディナの両聖地と紅海圏、シリア諸州、マグリブ諸州などに関する歴史情報も差し挟まれており、それらにも重要記事が少なくない。

この年代記部分の記述量についていえば、一〇五葉目の裏と一〇六葉目の表が白紙の状態であるため、実際には二五〇葉半であり、これは、同じく実質的には三〇七葉半から成る本史書の約八一・七%を占めている。つまり、エジプト州の州都を中心とした諸事件の記述が全体の五分の四以上を占めている『マバーヒジュ』は、明ら

かに「カイロ年代記」の範疇に位置付けられる史書といえるだろう。また、このうち特に詳細なヒジュラ暦一〇一六年の記事は八一葉半にも及び、年代記部分の約三二・五%、本史書全体の約二六・六%を占めている。そして、この一〇一六年とこれに次いで詳しい内容をもつ前年の一〇一五年とを合せれば、一二八葉半に達する。それは年代記部分の約五一・三%、全体の四一・九%に相当しており、この両年に関する記述は特段に厚いといえるだろう。

(七)の跋における注目点は二つある。第一に、自筆稿本の欄筆日が明記されていることである。それはヒジュラ暦一〇三八年三月一二日金曜日であり、西暦の一六二八年一月九日に当たる⁽⁸⁹⁾。つまり、後述のように、欄筆の時点で既に高齢に達していたとみられる著者イブン・アジャミーは、約二〇年前の一六〇八年までの諸事件を扱った史書をひとまずまとめた、ということになる(ただし、先に示したように歴代州総督に関する記事は一〇二〇年第七月／一六一一年九月の時点まで至っている)。

二つ目の注目点は、最後尾の次の記述である。

至高なるアッラーが望まれるならば、おおアッラー

よ！ ムハンマドとその家族の御前にヒジュラ暦一〇一七年の諸事件に関する記述の完了について御加護下さいますように。如何なる場合も、賞讃はアッラーに⁽⁹⁰⁾。

著者はこの年代記をさらに延伸する意欲を表明しつつ、『マバーヒジュ』という史書に一応の終止符を打っている。そして、この予告が『マバーヒジュ続篇』によって実現されることとなったのである。

また、この跋で確認される上記の欄筆日が、『マバーヒジュ続篇』を含めたこの史書全体において明記された最も新しい日付である点にも留意が必要である。次に取り上げる続篇の分量、その執筆に要した期間などを考慮するならば、イブン・アジャミーが死去したのは一六二九年以降であったとみてよいだろう。

オスマン朝期エジプトの年代記の構成に関しては、P・M・ホルトが、スルタンと州総督の在任期間を重視し、その各枠内に諸事件を時系列的に配置する「スルタン・パシヤ年代記」という類型を提示した⁽⁹¹⁾。これに対して、一八世紀初頭の三つの年代記(著者不明の『ナイーブたちの諸情報』、ハッラークの『カイロ年代記』、アフマド・シャラビーの『明徴』)を検討したJ・ハサウェ

イは、ヒジュラ暦の時系列の枠組みの中で諸事件が州総督の任期に従ってグルーピングされる、或いは、州総督の任期とヒジュラ暦の時系列がナラティブの枠組みとして共存するという特徴を指摘し、修正を図った。これらと比較しての『マバーヒジュ』の特徴は、州総督の事績を時系列的な事件史と切り離して配置している点にあるといえる。さらに、ナイル情報、聖者の伝記情報、身近なシャイフたちの伝記情報が年代記記述の前に置かれている構成も独特であり、オスマン朝期エジプトにおいては管見の限り類を見ない史書といつてよいだろう。また、ハサウエイは上記の3つの年代記の内容に関して、政治的事件、自然現象、死亡記事、珍奇な出来事（アジャールイブ）の4つの主たる範疇を抽出しているが、『マバーヒジュ』はこれらの範疇に収まらない、多様な歴史情報に溢れており、同時代のバクリーやイスハーキーと比較してもその内容的な充実は群を抜いているといつてよいだろう。

2. 『マバーヒジュ続篇』の概要と史料性格

全八四葉から成るこの稿本の書名と著者については、第二葉表にこう記されている。

これは『オスマン家の歴史 *Ta'rikh 'Al 'Uthman*』の第「空白」巻であり、イブン・アジャミーとして知られるシャイフ・サイイデー・アブドゥッラー al-Shaykh Sayidī 'Abd Allāh al-shahīr bi-Ibn al-'Ajāmī の著作である⁽⁹⁷⁾。

しかし、この一文は第二葉裏から始まる年代記本文とは全く異なる筆跡で記されており、明らかに後代の別の人物によって書き足されたものである。また、第二葉表の最下部の右側には、さらにまた別の筆跡で、*Kahira* 1808, N°1014, U. J. Seetzen という書き込みがあり、蒐集者のゼーツェンがこの稿本を一八〇八年にカイロで入手したことが分かる。

当該稿本の構成は表4のとおりである。第二葉の裏には、バスマラから書き起こされているにもかかわらず、唐突なかたちで、カイロ城のイエニチェリ軍とアザブ軍の兵舎 (*ḥiḥāq*) の修繕工事の完了に関する情報が日付も明示することなく提示されている⁽⁹⁸⁾。続いて、「同月一四日」に州総督メフメト・パシャが、カイロの糸市場 *Sūq al-Ghazl* のカバーフ屋街区 *Khutṭ al-Shawwā'in* の仕立職人と州政府の書記の両名を西部沙漠のオアシス地方 (*bi'lād al-wāḥat*) への流刑に処すよう命じた、という内

表4 『マバーヒジュ続篇』の構成

ヒジュラ暦	西暦	典拠: <i>Dhayl mabāhij al-ikhwān</i> ,	葉(概数)
1017 年	1608/1609 年	fols. 2v-38v.	36.5
1018 年	1609/1610 年	fols. 38v-72v.	34
1019 年	1610/1611 年	fols. 72v-84v.	12

容の記事が置かれている⁽⁹⁶⁾。この記事は第三葉表の冒頭の記述へと無理なく続いているが、上記のような唐突な始まり方、それに「同月一四日」と略記されている点は、第二葉裏に先立つ年代記記述があったことを窺わせる。また、第二葉裏と第三葉表以降との間では、「*ṭṭalika* (あれ)」の書き方が全く異なるなど、筆跡の相違が明らかに認められる。

以上のような「異状」とバスマラから始まっていることを考え合わせると、ここに一つの仮説が浮上する。当該稿本がこのように不自然な始まり方となったのは、劣化或いは破損の状態にあった『マバーヒジュ続篇』稿本の冒頭部分から、後へと繋がる判読の可能な部分を別の入

物が書写して付加したことによるのではなからうか。これについては更なる検討を要するが、次の点は指摘できるだろう。すなわち、第三葉の表から裏にかけて「同月」に始まる記事が四つあり、続いて「それから、同年の良きサファル月が始まった」とあり、これに続き、時系列にはば沿った一連の年代記記述があり、ついには「二〇一八年の諸事件の記述」へと至っている記述の流れを考慮すれば、前記の「同月」はヒジュラ暦一〇一七年のムハッラム月を指すものと推断されるのである。

当該稿本は、その第三葉以降の筆跡が『マバーヒジュ』のそれと同一であり、さらにそこでの文体や欄外追記の手法も全く同じであるから、『マバーヒジュ続篇』と呼んでよいだろう。ただし、イブン・アジャミーは、アリー・パシヤの任期中のベスト流行について「私はそれを第一巻において述べた」と記している⁽⁹⁷⁾ので、明記されてはいないが、著者がその心中で当該稿本を『マバーヒジュ』の「第二巻」と位置付けていたとみられる点にも留意が必要である。

『マバーヒジュ続篇』は第八四葉の裏で、ヒジュラ暦一〇一九年第三月／一六一〇年五―六月における視覚障碍者 (*ḍarr*) の学者ミンヤーウィー *Abū 'Abd Allāh*

Muhammad al-Minyawi⁽¹⁰⁾の死亡に関する短い記事をもって突如絶筆となり、『マバーヒジュ』のような跋に当たる部分を備えていない。先述のように、『マバーヒジュ』において確認される最後の日付は一〇二〇年第七月二二日／一六一一年九月三〇日であるが、その時点にも届くことなく、この年代記『マバーヒジュ続篇』の記述は断絶に至ったのである。

そして、この第八四葉裏の下部には、「至高なるアッラーがその恩寵をもって我らをお助け下さいますように。サイイド・アブドゥッラー・アジャミーの『オスマン家の歴史』の第「空白」巻が終わった。アーメン。」と別の筆跡で書かれた紙が貼付されている。筆者が稿本を実際に手に取って当該箇所を精査したところ、稿本の貼紙の下に位置する部分には何も記されていなかった。このため、イブン・アジャミーが体調の問題、或いはその他の理由からこれ以上書き進めることができなかったと推察される。その結果、ヒジュラ暦一〇一九年の記事は約一二葉という少なめの分量となっている。しかし、一〇一七年及び一〇一八年の記事はそれぞれ三〇葉を超えており、『マバーヒジュ』の一〇一五年や一〇一六年の記事の分量には及ばないが、当該期のカイロに関してかな

り充実した歴史情報を内包しているといえるだろう。実質的に約八二葉半から成るこの続篇は、『マバーヒジュ』の年代記部分と合わせた年代記記述全体（三三三葉）の約二四・八%を占めている。カイロ事件史の貴重な延伸と評価すべきであろう。

以上のように、当該稿本は二年余の期間を扱うに過ぎぬ続篇ではあるが、本篇同様に当該期のカイロを中心としたエジプト州の社会・経済・政治・軍事・文化に関する情報の宝箱といえる。ここではその豊かな内容に立ち入ることは控えるが、就中特筆すべきは、エジプト州総督オキユズ・メフメト・パシャの強権を後盾に、州都のムフタスィブのムハンマド・アーガー Muhammad al-ʿAṣṣā⁽¹¹⁾が遂行した市場行政の諸側面に対して、イブン・アジャミーが厳しい具体的批判を加えた記事が散在しているという点である。こうした州都カイロのヒスバの実状に関する細かな諸情報は、この著名なエジプト州総督による州体制の立て直しをめぐる従来の歴史的評価に再考を迫るものであり、今後詳しい分析が不可欠である。

『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』が依拠した叙述史料についても、検討は未だ不十分ながら付言しておきたい。両史料においては、イブン・アジャミーに情

報をもたらしした人物の具体名が記された箇所が少なからずあるが、著者名の明示された典拠への言及は僅かである。「著者不明の小冊子 (kurṭasa)」に依拠した箇所もみられるが、著者名を示した典拠には、ファアティマ朝高官でシャーフィイー派法学者のクダーイー(一〇六二年歿)の『歴史 *Ta'riḥ*』第三卷、マクリーズイー(一四四二年歿)の『エジプト地誌 *al-Khiṭa'*』スユーテイーの『ローダ島史 *Kaṭkab al-rumda*』などである。そして、『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』に共通する史料的特徴として指摘できるのは、その記述の多くが同時代を生きた著者の伝聞情報や目撃情報で構成されているという点であろう。

3. イブン・アジャミーとその家族

まず注視したいのは「イブン・アジャミー」という呼名である。アジャミーは「アラブが解さない言語の話者」すなわち「非アラブ人」、その中でもしばしば「ペルシア語の話者」を指す語であり、このようなエトノスの要素をもつ父系の出自であったことが推察される。しかし、『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』の中には、これに関する歴史家自身による説明はなく、またペ

ルシア語圏に関しての立ち入った言及もみられない。

ところで、前述のとおりイブン・アジャミーの家族に関する個人的情報の多くは『マバーヒジュ』の「ナイルの増水情報」の部分に挿入されている。例えば、ヒジュラ暦九八八年の増水期の最高値が二二ズイラーウハイスバウという前代未聞の高水位を示した「偉大なるナイル (Nā' azīm)」について述べた後で、「同年、私は処女 (bikr) であった最初の妻と結婚したが、それは第一二月の終わり頃(一五八一年二月半ば頃)のことであった。」と付記されている。それが二五歳の時の結婚であったと仮定すれば、イブン・アジャミーは一五五〇年代半ばの生まれということになるだろう。だが、マフムト・パシャの任期(九七三年第一〇月一日―九七五年第一月二四日/一五六六年四月二日―一五六七年十一月二六日)に関する箇所の欄外追記には、「彼(マフムト・パシャ)の時代に私は存在していたが、思慮分別の年 (sin al-tamyiz) には達していなかった。」とある。「思慮分別の年」はヒジュラ暦に則しての七歳を意味すると考えられるので、仮に五歳であったとすれば、一五六〇年代初頭の生まれということになる。そうであれば、最初の妻との結婚年齢は先の仮定よりも低く、イブン・

アジャミーが二〇歳前後のこととなる。そして、九八九年／一五八一―一五八二年には長男のムハンマドが誕生したが、一年後に喪失したことも簡潔に記されている。⁽¹¹⁾

それから約一六年後、イブン・アジャミーはヒジャーズ巡礼へと旅立った。紅海 *Bahr al-Qizum* を経由してヤンブウ港 *al-Yanbu' al-Bahri* でアラビア半島のヒジャーズ地方に上陸し、聖地メディナを詣でた後、一〇〇七年十二月／一五九九年六―七月にハッジ巡礼を果たしたのである。その際に彼は、「被扶養者たち (*yafal*) と子供たち (*awlad*)」という拡大規模の家族を伴っていた。聖地メッカにムジャーウィル (聖域の男性滞在者) として長逗留し、家族と共に第九月の断食斎戒をしたことも記されている。⁽¹²⁾ カイロを出発したのがいつかは不明だが、約一年かけての長旅であったように見受けられる。このような家族揃ってのハラマイン巡礼を挙行した事実は、推定四〇歳前後のイブン・アジャミーがこの時点で既に複数の子をなし、相応の財力を備えるに至っていたことを示している。しかし、それから三年足らず後の一〇一〇年第九―一〇月／一六〇二年二―四月、カイロにおけるペストの流行によって、彼は「偉大な二人の息子」を失うという悲劇に見舞われた。⁽¹³⁾

ヒジャーズ巡礼を行なったヒジュラ暦一〇〇七年は、イブン・アジャミーとその家族にとって衝撃的な事件を経験した苦難の年でもあった。イブン・アジャミーと同名の父アフマドが午後の礼拝後にブーラークのハティ―リー街区 *Harat al-Khatri* の自宅で刺殺されたのである。その顛末について『マバーヒジュ』には次のように記述されている。

彼の死因は以下のとおりであった。彼は四人の男 (*rijal*) を育て、チーズ (*juḍa*) を製造させ、彼のためにそれを売るように、彼らに対して複数の雌牛 (*abqat*) を買い与えた。そして、彼はそれに関して彼らに大金を請求し、彼らについて法的な文書を作成した。そこで彼らは召喚され、彼らのうちの一人が短期間投獄されることとなった。しかし、彼らに対する神の決定に従ってその男は釈放され、彼 (イブン・アジャミーの父) は彼らから何も得ることができなかった。その後、彼らのうちの一人が来て彼の住居に身を隠すと、ナイフで彼を襲撃し、腕の静脈を切断した。それは午後の礼拝後のことで、ランプが灯され、夕市が立っていた。そして彼 (犯人) は逃走し、誰も追跡しなかった。それから七日

が経ち、彼(イブン・アジャミーの父)は至高なるアッラーの御慈悲に向かい、死に至ったのである。⁽¹³⁾

つまり、チーズ製造業の出資者であり、おそらくはその経営者でもあったイブン・アジャミーの父は、金銭上のトラブルから、自らが育成したチーズ職人たちの中の遺恨を持つ一人の男の手で殺害されたのである。『マバーヒジュ』には続けて次のように記されている。

生前に彼(父)は私に、カラーフアのイマーム・シヤフイー「廟」の近くに彼を埋葬することを委ねていた。そこで私は彼の命令に従い、碩学のイマームであったイブン・アビー・シャリーフ Burhan al-Din ibn Abi Sharif の廟の向かいに位置する南門の墓に彼を埋葬した。⁽¹⁴⁾

これをそのまま読めば、イブン・アジャミーは父の希望したかたちの埋葬に立ち会い、葬儀を主導したようにみえる。そして、この惨事の発生日は記されていないのだが、メッカ・カイロ間の移動に要する日数も考慮すれば、前述のハッジ巡礼からの帰還後ではなく、出立前のこととみるのが妥当ではないかと考えられる。そうであるならば、長期に亘る家族連れの両聖地巡礼は、悲嘆や不安の克服、魂の再生を希求しての道行であったという

ことになる。そして、巡礼行の経済的な支えが相続した父の遺産であったとも推察されるのである。

『マバーヒジュ』にはさらに、警察当局の対応に関する記事もある。この殺人事件の報を受け、ブーラク警察署長 (sāhib al-shurṭa al-sughra bi-Būlāq al-Qāhira) とイスラーム法廷 (majlis al-shar') の公証人 (shahid) 二名が事件の調査のために来訪し、その結果が一通の文書に記録された。また、イブン・アジャミーは、その際の調査料に関して、

カイロやその他における行政法 (qanun) や慣習法 (ʿada) では、ある人物が住居で殺害された場合には、その場所の住民たちから調査料 (malum al-kashf) が徴収されることになっている。しかし、この調査の際には彼(父)の財産から一ディーナールが支払われることとなった。そしてこの事件では、その街区の住民たち (ahl-tilla al-hara) に被害や損失は生じなかったのである。⁽¹⁵⁾

と記し、街区住民に負担を掛けなかったことをせめてもの慰めとしている。そして、こうした一連の事件記事は、殺害の実行犯に対する神罰祈願の文で結ばれているが、『マバーヒジュ』とその続篇に犯人逮捕に関する記述は

一切見当たらない。イブン・アジャミーはその後半生において、犯罪被害者の遺族として心痛や不安を抱えていたに違いないと想像されるのである。

なお、イブン・アジャミーの拡大家族については、その他に次の三人の成員が『マバーヒジュ』に確認される。具体的には、九八八年／一五八〇―一五八一年に死去し視覚障害者(darī)で非識字者(ummi)であった、氏名の記されていない母方のおじ(khal)、九八九年第一二月／一五八二年一月に初めてのハッジ巡礼を實行し、巡礼地アラファートに一七回も逗留し、メッカで何年もムジャーウイラ(聖域の女性滞在者)として過ごした、やはり氏名不明の父方のおば(amma)⁽¹⁷⁾、そして、その由来名から彼と同じく計量士であったとみられる、義兄弟ないしは娘婿(shir)のムヒブッディーン Mulibb al-Dīn al-Qabbānī al-ma'rūf bi-lbn al-Naqqāsh である⁽¹⁸⁾。

4. イブン・アジャミーと河港ブーラーク

カイロの河港ブーラークの都市的發展は、マムルーク朝のナースイル・ムハンマド一世の第三期治世(一二三〇―一三四一)に始まり、紅海・インド洋圏交易のクース・アイザーブ經由ルート⁽¹⁹⁾の衰退とシナイ半島經由ルー

トの台頭、さらにはナイルデルタの経済的成長によって一五世紀に入り本格化した⁽²⁰⁾。その後、スルタン・ジャクマク期(一四三八―一四五三)以降にブーラークの埠頭群や道路網の開発整備が進み、さらにはオスマン朝という北の大国への編入がこのカイロの北港の發展を加速させた⁽²¹⁾。ハドウム・スレイマン・パシャ(在任一五二六―一五三五、一五三七―一五三八)を皮切りに、オスマン朝エジプト州総督たちがウィカーラ(商館)やモスクなどの都市施設を次々と付加したことで、ブーラークの繁栄は確かなものとなっていた。この商港は、一八世紀末の時点で、六五のウィカーラ、二五のモスク、七つのハンマーム、一二の給水所を備える充実ぶりを示すに至った⁽²²⁾。

イブン・アジャミーの父アフマドの家があったハテイーリー街区は、ハテイーリー集会モスク Jam'i al-Khān を中核としたブーラーク南部の居住区で、ナイル川岸を長辺として三角形を成すこの河港の南端⁽²³⁾、麦藁埠頭 Mawridat al-Tibn の近くに位置した。この宗教施設について中近世の叙述史料の中で最も詳細な情報を伝える、マクリーズイーの地誌記述(一五世紀前半)の要点をまとめれば、以下のとおりである⁽²⁴⁾。

ハティーリー集会モスクの所在地は嘗てナイルの浸水地域の中にあつたが、七〇〇年／＼一三〇〇—一三〇一年頃から川筋が西方へと移動したことで耕作地として利用されるようになり、またカイロ市民の集う散策場所 (mutanazzah) となつた。その後、イブン・ズンブール Sharaf al-Din Ibn Zumbūr がそこに揚水車 (saqiya) を据え、その隣にイブン・イッズ・アル＝ファッラーシュ Muhammad ibn 'Izz al-Farrāsh がナイルに臨む邸宅を建てたが、彼の死後、ジハート管理官 (nāẓir al-jihāt) のイブン・アズラク Tāj al-Din Ibn al-Azraq がそれを購入して居を定めた。しかし、そこで多様な禁止行為が度々なされたため、この邸宅は「違反者たちの家 Dar al-Fasiqīn」という不名誉な呼称で知られるようになった。その後、王室財産監督官 (nāẓir al-khāss) のイブン・ナシシュウがイブン・アズラクを捕囚のうえ財産没収処分とし、この邸宅は百騎長アミールのアイダムル・ハティーリー 'Izz al-Din Aydamur al-Khaṭrī (七三七年第七月一日／一三三七年二月三日歿) へと売却された。イブン・ハティーリー Sharaf al-Din Awḥad ibn al-Khaṭrī のマムルーク出身のアイダムルは、邸宅を取り壊し、そこに当該モスクを新設して「悔悟のモスク Jamī' al

‘Tawba」と名付けた。ナイル川に面し、エジプトで最も美麗なモスクの一つとも評されたこのモスクには、大理石の説教壇が据えられ、シャーフィイー派法学の講座が置かれ、貴重書を備える図書室も附設された。また、同モスクのために、ジャマリーヤ地区のバイバルス二世修道場の向かいのダルブ・アスファル al-Darb al-ʿAsfal に所在したアイダムル邸をはじめ、数多くのワクフ物件が設定された。その総工費は四〇万ディルハムに及び、アイダムルの死去直前の七三七年六月二〇日／一三三七年一月二四日に最初の金曜礼拝が行なわれた。「悔悟のモスク」という呼称は『マバーヒジュ』の中で用いられていないが、イブン・アジャミーが父の家に近在するこのモスクの利用者であつたことは、以下のような記事に確認される。

同月(一〇一八年第一〇月／一六〇九年十二月一六—一六〇一年一月)、私はブーラクで「エジプト中部[S]」バフナサーウィーヤ地方 Iqlīm al-Bahnasāwīyā の人々の一団と出会つた。その時、私は故アイダムル・ハティーリーの集会モスクに座つてゐた。私たちがこの年のナイル川の増水停止について語り合つてゐると、彼らは私に次のことを伝えた。すな

わち、上エジプト南部の大部分とバフナサーウィーヤの多数の村々では灌漑ができず、水牛・牛・羊などの家畜が死滅した。それらの村々が牧草地の不足から荒廃し、水牛や牛は嘔吐して間もなく死んでしまった。そして、一〇ディーナールの価値の水牛や牛が三ディーナールで売られたが、その衰弱の激しさから購入希望者が見出せなかった。彼らのもとでは、一ラトル当たり二ニスフの価値のバターオイルが五ニスフで売られ、しかも少量しか見出せなかった。彼らは、近年このような日々を目にしたことがなかったという。

以上のように、ブーラークのハティリー集会モスクの界限がイブン・アジャミーの家族生活の中心的な場であった。他方、若い頃の彼の職業生活で重要であったのが、州総督コジャ・スイナン・パシヤ（在任一五六八、一五七一一一五七三）が建造した、ブーラークの施設複合体スイナーニーヤ al-Sināniyya の一角にあった商館である。著者との商館の關係は一〇一五年第七月／一六〇六年十一月の以下の記事に示されている。

同月、ルーム地方とシャーム地方からの輸入商品が海路で到着した。またキプロスから運ばれたイナゴ

豆 (kharrib) も同様であった。それはカーヒラで不足し、一キンタール当たり五〇ニスフで売られていたのだが、これによって価格は下がり、一キンタール当たり三四ニスフで売られるようになった。私はそれをブーラークの故ワズイル・スイナン・パシヤ商館 Wikalat al-marḥūm al-Wazīr Shān Bāshā の計量士であった時に量ったが、それは一キンタール当たり一四ニスフであった。そして、宦官のハサン・パシヤの時代に物価高 (ghala) であった際には、一キンタール当たり二四ニスフであった。

ここでは、糖分摂取に有用なイナゴ豆のカーヒラにおける高騰がキプロスからの供給によってある程度解消されたが、それでも嘗ての価格と比べれば高値であったことが指摘されている。そしてこの記述の流れに沿って読むならば、イブン・アジャミーが同商館で計量業に従事していたのは、ハドウム・ハサン・パシヤ Ḥasan Bāshā al-Tawāshī の任期の物価高騰時よりも前の時期のことだったとみてよいだろう。『マバーヒジュ』の別の記事によれば、容姿端麗であったこの宦官州総督の着任日は九八八年第五月一六日／一五八〇年六月二九日、退任日は九九一年第四月一三日／一五八三年五月六日であった

から、イブン・アジャミーのスイナーニーヤの商館における計量活動は、一五八〇年初頭以前であったということになるだろう。そうなると同商館は、彼が最初の妻と結婚する前、つまり十代後半頃の最初の職場だったのかもしれない。

スイナン・パシャ・モスクはブーラクのランドマークとなり、カイロの都市景観の「オスマン化」に貢献したが、この大モスクを中核施設としたスイナーニーヤに関する『マバーヒジュ』の記述は、歴代州総督たちの実績を扱った箇所全体の中で抜群の分量を示している。それは、イブン・アジャミーが、一時期自らの職場として通動したこの施設複合体とその運営に関する情報を、特別に多く得ていたからだと考えられる。カイロの河港の近世的空間において肝要な位置を占めたこの施設複合体について、『マバーヒジュ』は同時代の叙述史料の中では例外的に種々の独自情報を伝えているのである。要約的に示せば、以下のとおりである。

後に大宰相となったコジャ・スイナン・パシャはエジプト州総督を二度務めたが、一度目の任期はイエメン州に赴く前のことで、九七五年八月二四日／一五六八年二月二四日から九七六年第六月一三日／一五六八年二

月三日まで、二度目の任期はイエメン州からの帰還後の九七九年第二月一日／一五七一年六月二五日から九八〇年第一二月二九日／一五七三年五月二日までであった。

イブン・アジャミーはこの「大宰相 (al-wazīr al-ʿaẓam)」スイナン・パシャの建設事業の大きさを強調し、なかでもブーラクのスイナン・モスクについて詳説している。彼はこれをモスクではなく「偉大な学院 (mad-rasa ʿazīma)」と表現し、「その建設が完了したのは「ヒジュラ暦の」九七〇数年であり、当時私は初等学校 (maktab al-taʿdīb) にいた。」と記している。そして、ミナレットに「ルーム地方様式 (ṭarīqat al-bilād al-Rūmiyya)」を採用するなど「カイロの諸学院の様式 (ṭarīqat al-madāris allaw bi-al-Qāhira)」と異なるこの建築物の特徴に注目し、また、大ドーム完成後の崩落事故で建設業者や労働者が下敷きとなり、エジプトの建設業者たちでは修復できずにルーム地方からキリスト教徒の技術者を招聘して再建が叶った、という独自情報も伝えている。

続いて、施設職員に関して、イマーム、説教師 (khaṭīb)、四〇名のスーフィーたち、四名の礼拝呼掛け人たち、計時係 (muwaqqit)、照明係 (waqqad)、用務

員 (farrash) 、門番 (dawwab) 、インドの香料の焚香係などの当初からの施設職員に加え、毎日夜明けの札拝後に『クルアーン』第六章の家畜章 (al-Aḥām) を読誦する四〇名、日没の札拝と夜の札拝の間に『クルアーン』を毎日二ヒズブずつ読誦する各六名から成る二組がスィナン・パシヤの大宰相在任中に増員されたと記されている。⁽¹³⁴⁾ なお、イブン・アジャミーが「マドラサ」と呼ぶ当施設であるが、記述内容からは高等教育施設としての機能は確認されない。

次にスィナーニーヤの一角を成すマクタブ (初等学校) とその下階に位置するサビール (給水所) に関する情報が示され、それらの職員にサビールの給水係 (qayyim) 、教師 (muʿaddib) と助手 (ʿarif) がいて、生徒は二〇名の孤児としている。続いて二つのウイカーラ (商館) 、それに布・毛糸服・上衣が売られているカイサーリーヤの説明へと移る。各ウイカーラの上階のラブウ (集合住宅) が各々の位置関係を含めて詳述され、さらにスィナーニーヤの一部として前記「マドラサ」の沐浴所近くにハンマーム (公衆浴場) があり、その上階にあるラブウの下、(おそらくはハンマームに隣接して) 各種穀物を売る倉庫群 (hawāṣil) が配されていたとして

いる。その後、職員のパンを製造するための製粉所 (ṭāḥūn) とパン焼き窯 (furn) が管財人 (ḥāẓir) の一人によって増設されたと述べられている。⁽¹³⁵⁾

この施設複合体のワクフ管財人の下で、カイロで運営を統括する現場管理人 (muḥashir) については、ワクフ設定者のスィナン・パシヤの存命中はギザ県のカーディーであったアフマド・ブン・シヤアバーン al-Afandī Ahmad ibn Shāban が、その死後にはこのパシヤの寵愛や尊敬を享受し、イエメンへの赴任の際にも同行したデイーワーンの記録官 (muwaqqiʿ bi-al-Diwan al-ʿAlī) のカーディー・スウーディー Abū ʿAbd Allāh Shams al-Dīn Muḥammad al-Suʿūdī が務めた。そして、スウーディーは晩年に視覚を失ったため、スルタンのワクフの会計書記 (kātib al-muḥāsabāt bi-al-awqāf al-sultāniyya) でカーディーのアップバーディー Muḥammad Zayn al-ʿAbbādī が代理で同職を担い、スウーディーの死後に正式に同職に着いたという。⁽¹³⁶⁾

このモスクのイマームを務めたのは、就任順に①シャイフ・ブルッルスィー ʿAbd al-Wahhāb al-Burullusī ②シャイフ・ブサーティー Muḥammad al-Busāṭī ③カーディーのシャムスッディーン Shams al-Dīn Muḥammad

②の子)であり、③は『マバーヒジュ』の執筆時にもまだ同職を務めていた。⁽¹⁸⁾①のブルッルスィーは、ブーラクの商人名家アースィー家のハワージャー・アブドゥッラフマーン・Abd al-Rahmān ibn al-ʿĀṣiのスイナン・パシャへの執り成しによってこの職を獲得した。ブルッルスィーは、この大商人アブドゥッラフマーンが設立したマクタブの児童の教師 (muʿaddib al-aṭfal) も兼務していたが、アブドゥッラフマーンの死後にその甥でやはりハワージャー (紳商) の尊称を帯びるアブドゥルカウイー・Abd al-Qawīがマクタブのワクフ管財人職を継承すると、彼との間で諍いが起こり、結局は両方の職から解任されることとなったという。⁽¹⁹⁾また、イブン・アジャミールは、ブルッルスィーが「現世とこの世の物資の獲得のために」マリーク派から法学派を変えたとも指摘している。⁽²⁰⁾何れの法学派かは明記されていないが、「オスマン朝の法学派」のハナフィー学派であったと推測される。

ここで特に注視すべきは、上記のシャイフが「私たちの同郷人であるブルッルスィー」と記されている点である。⁽²¹⁾これは、ナイルデルタの最北部、地中海に面した汽水域ブルッルス湖の畔にある税関の港ブルッルスが、イブン・アジャミール家の故郷であったことを示唆する重

要記述といえる。⁽²²⁾なお、②のブサーティーも「イマームの職のために」シャーフイー学派からハナフィー学派へと法学派を変えたとされており、⁽²³⁾「法学派の鞍替え」が珍しくなかった当時の実態が窺えよう。

また、最初のハティープは前述の現場管理人シャムスッディーン・スウーデーの兄弟でサーリフ (salih, 信仰正しき人、聖者) のシハーブッディーン Shihāb al-Dīn al-Suʿūdī であり、彼はサーリバ・トゥールーニーヤ街区 Khutʿ al-Saliba al-Tūlūniyya に住んでいた。続く後任のスーフィー家系出身のブハイリー・Abd al-Raʿūf ibn Kanaʿ al-Dīn al-Buḥayrī は、『マバーヒジュ』の執筆された頃に同職を務めていた。そして、「前述のマドラサの諸職の大部分は前記のブハイリーの息子たちの手中にあった」と述べられている。⁽²⁴⁾

以上が詳細なスイナーニーや関連記事の概要であるが、⁽²⁵⁾さらに、創設時のブーラクの動きを鮮明に描いた次のような記述も残している。

そして、私が目にした珍事は次のとおりである。ある練り粉職人がワズイル・スイナンのマドラサの形に練り粉を造り、それをパン焼き窯でパンにして、緑青 (zinjār) や砒素 (siḥāqum) で色を付け、ドー

ムやミナレットや周囲の胸壁飾り (shurūfāt) まづ造形した。そして、それは、金属打楽器 (nugqariyya) を伴ってブーラクの道々を進んだのである。⁽¹⁵⁾ 緑青や砒素で緑に色付けされた細工パンは今日の視点では危険食品だが、町のパン職人が自慢の腕を披露したこの落成記念の民衆的な祝賀行進に、強い視覚的インパクトを放つ大モスクの出現に接したブーラク住民の高揚感が看取されよう。

ところで前述のように、スイナーニーヤには二つのウィカーラが存在した。それらは「大ハーン al-Khan al-Kabir」と「小ハーン al-Khan al-Saghir」とも呼ばれ、ハンナーはワクフ証書の記述内容や建築の特徴から、この「大ハーン」と一九八三年の時点で現存していた「イナゴ豆商館 Wikalat al-Khamūb」が同一の施設であり、同商館は一八世紀以降に「イナゴ豆商館」と呼ばれるようになったと結論付けた。それはブーラクに特徴的な長方形プランの二階建て低層建築であったが、敷地面積が約三八四〇平米にも及び、ハサン・パシヤ商館 Wikalat Hasan Basha、油商館 Wikalat al-Zayt と並んでこの河港の三大商館の一つであった。⁽¹⁶⁾ イブン・アジャミーの職場がこの大商館と「ラブウの商館 Wikalat al-

‘Rab’ al-Sinaniyya」という別名をもつ小商館の何れであったのかは判然としないが、スイナーニーヤの商館関係者との親交は、商館のタージル(大商人)に関する次のような死亡記事にもみとれる。

一〇一四年第一月二九日の夜／一六〇五年六月一日、偉大で尊い我らの仲間、故ワズイール・スイナン・パシヤのウィカーラのタージルたちの一人で、イブン・アジュールド Ibn al-Ajrūd として知られるハーッジ・マンスール Hajj Mansur が死去した。彼は信仰と善行と喜捨 (sadaqa) の人々のひとりであった。彼は喜捨として毎日二五ラトルの丸平パンの分配を行ない、貧者たちがそのウィカーラの門において彼の許に参集し、彼の配下 (jama‘a) のある者が彼らに対してパンを一枚ずつ配っていた。また、ある貧者が亡くなると、彼は至高なるアッラーに向かう死に装束を施したのである。そうしたことにもかかわらず、彼の資産は約一〇〇〇デイーナールに過ぎず、ブーラクのタージルたちのような財力ではなかった。しかし、彼は長期に亘ってその親切と慈善 (ihsan) で私を充たしてくれた。至高なるアッラーが彼を嘉し、楽園をもって彼に報いられます

ように！⁽¹⁴⁾

スイナーニーヤの何れかの商館、単に「商館」と表現しているのおそらくは大商館の方を拠点に商業活動を展開したこの大商人は、喜捨に情熱を注ぐあまり、意外にも蓄財をしていなかった。或いは、そのように周囲からみられていた。そして、イブン・アジャミー自身も、このブラーク商人の積極的な慈善行為の恩恵を被っていた。信仰に篤い商館の富めるタージルによる喜捨は、貧者のみならず、そこで働く計量士をも対象に含む広がりを見せていたのである。また、この記述は、ワクフ対象施設ではなく、慈善の財源を生むワクフ物件である商館の「門」を舞台とした、施設関係者による個人的な救貧実践の実態を伝えている点でも注目に値する。

イブン・アジャミーの富裕なブラーク市民との関わりは、そのほかにも確認される。『マバーヒジュ』には、一〇一六年第七月四日夜／一六〇七年一〇月二四日、ハッジ巡礼の帰路で死去した、フィラールジー al-Firari⁽¹⁵⁾ として知られるアフマド親方 Mu'allim Ahmad ibn al-Mu'allim Yusuf に関する興味深い記事がある。この親方は、「複数の亜麻仁油及び胡麻油の压榨所の搾油業者 (mudawilib bi-al-ma'sir allati yu'mal bi-ha al-zayt

al-mustakhrāj min bizr al-kittān wa al-sayārij)」であり、資産家 (dhū al-tharwa) であった。そこには、ギザ県での農産加工で得た亜麻種子を用いた亜麻仁油の製造に関する記述もみられる。アフマド親方はハッジ巡礼に際し、カイロに残した息子の一人に巨額の資産を託した。

イブン・アジャミーは、この息子から直に次のような話を聞いている。それによれば、アフマド親方の金庫には二万デイナールの金貨があったが、遺産相続の後、息子は困窮し、借金を背負ってしまった。若衆 (al-dā'in) に耽溺したことがその理由であった。また、彼の兄弟たちも貧窮に陥り、「彼らの状態は衰微した」という。⁽¹⁶⁾ イブン・アジャミーは、アフマド親方に話を戻し、さらに書き加えている。

彼らの父 (アフマド親方) は最初、籠を頭に乘せてカーヒラで鶏を売り歩いていた。それから彼は富裕になり、財を成した。そして彼は、ブラークに商館やラブウを複数保有するイブン・アースイー・ブルルスィー Ibn al-'Āsī al-Burullusī として知られたアブドゥッラフマーン 'Abd al-Rahmān の仲間 (aqrān) の一人であった。⁽¹⁷⁾

しがない鶏の行商からブラークの紳商と懇意の富裕な

製油業者へと成り上がった初代と、身上を潰した後継者たちについて、イブン・アジャミーは感慨を込めて縷述しているのである。

さらに付け加えれば、一〇一八年第七月／一六〇九年一〇月、ブーラクのムカッダム・トゥウマ街区 *Harat al-Muqaddam Tu'ma* のズィフザーフ *Jamal al-Din Yusuf al-Zifzaf* という生ける聖者 (*salih mutaqad*) の家で婚礼と割礼の大宴会が催され、ウラマーや篤信の人々 (*ad-dal-salāh*) が参集し、そこでは貧民への施行 (*itām*) も実践された。これに関する『マバーヒジュ統篇』の記述には、「当時私はブーラクに住んでいたが、それに出席することができなかった」とあり、少なくともこの時点のイブン・アジャミーの居住地がブーラクであったという確証が得られる。なお、ブーラクに居住したこの有力聖者との関係については、この歴史家の宗教実践や学者・スーフイー・聖者との交流関係に照準を合わせた次稿にて詳論することにした。

5. 計量士としてのイブン・アジャミー

スイナーニーヤの商館でのイブン・アジャミーの職務内容に関して、『マバーヒジュ』とその続篇に上記以外

の情報は見出せない。しかし、その他の場における彼の計量士としての活動については少なからず記述が存在する。本章では、歴史家としては珍しい特徴といえるこの計量士としての面に照準を合わせ、その具体像を可能な限り描出してみたい⁽¹⁵⁾。

近世アラブ都市の市場では、商品計量の専門技術者たちが不可欠な役割を担っていた。彼らは二つに大別され、穀物の容積の測定者がカイヤール (*Kayyal*) であり、それ以外の種々の商品について重量を棹秤 (*qabban*) で測定する計量士がカッバーニー (*qabbani*) であった⁽¹⁶⁾。オスマン朝期カイロのカッバーニーの実態は未だ殆ど解明されていないが、一八六四―六五年と一八七九―八二年にエジプトに滞在した好事家的なアラブ研究者のロネ Arthur Rhoné の記述によれば、計量士は商館などで買い手の要請に応じて、エジプト州政権公認の分銅を用いて厳正に重量を確かめていたという⁽¹⁷⁾。ハンナーもカイロの有力商人アブー・ターキーヤ (一六二四歿) に関する研究において、カッバーニーがサッラーフ (両替人) と共にウィカラ (商館) での取引の場に参加していたとしている⁽¹⁸⁾。

イブン・アジャミーの計量士としての活動に関しては、

一〇〇〇年第一月初旬／一五九一年一〇月下旬にカイロを襲った大洪水について、自らの体験を交えつつ叙述した『マバーヒジュ』の以下の記事がまず注目される。

激しい雨が降り、それはメッカやシリア地方に來襲する洪水のようであり、まるで革水筒の口々から降り注いでいるかのようにであった。その日、私は、ラスラーニーヤ al-Rasāniyya として知られている荒廃したマドラサに隣接した、ジェツダ総督として知られた故アミール・ジャーニー・ベク Jani Bik の農園 (ghayl) においで、秤 (qabbān) でナツメヤシの計量を行なっていた。「中略」それから、私はカナティル・アツィスィバーウ街区 Khutī Qanāṭir al-Sibā' のマクアド (maq'ad) において計量に専念した。そして私がその計量を終えた時、それは午後の礼拝の後であったが、この大洪水が発生したのである。そのため、私の服の全てやターバンはすべて濡れになってしまった。私は自宅へ向かうとハーキム運河 al-Khalīf al-Hakīmī から下ったが、運河の水はフスタートの運河開きの日のその如くみえた。そうして私は自宅に辿り着いたが、その日私は急襲した激しい寒さから破滅の淵にあった。そし

て、この洪水はブーラークの河岸にあった多くの穀物やその他のものを荒廃させた。

ラスラーニーヤ学院については不明であるが、「アミール・ジャーニー・ベクの農園」に該当するとみられるのは、マムルーク朝末期のスルタン・カーイトバーイ期にこの有力アミールのワクフ地であったことが確認されているギザ県のズィニン Zīnīn 村である。河港ブーラーク育ちのイブン・アジャミーが対岸のギザ県でも活動していたことは、一〇一七年第七月／一六〇八年一〇一一年一月、同県北部のニクラー郷 Nalīyat Nikla' で当時豊作であった柘榴が四ラトル当たり一ニスフという安価で売られているのを彼が目撃した、とする『マバーヒジュ続篇』の記事によっても裏付けられる。これ以外にギザ県での仕事について伝える記述は見出せないが、州都カイロの対岸に広がるギザ県が計量士としてのイブン・アジャミーの活動範囲の一部であった蓋然性は高いと思われる。また、『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』はブーラーク・アツィタクルール、エンバーバ Imbāba などギザ県に関する情報を多く含む点でカイロ年代記として異彩を放っているが、それは、こうした「出張活動」によって州都から西方へと延伸された、著者のメンタル

マップの広がり映すものと理解されよう。

この一五九一年の時点で確認されるカナーティル・アツィスィバーウ街区⁽¹⁰⁾のマクアド（開廊）におけるイブン・アジャミーの計量の仕事は、長期に亘って家計を支えていたとみてよいだろう。この界隈はオスマン朝期のカイロの南部地域においてイブン・トゥールーン地区と共に都市下層の居住地であり、⁽¹⁰⁾多分に周縁的な性格を帯びていたとみられる。

一〇一六年⁽¹⁰⁾第二月一三日／一六〇七年六月九日、このカナーティル・アツィスィバーウ地区でイブン・アジャミーは「悪行の軍隊（*‘askar muṣīḍin*）」に属する酔漢二名を目撃しており、また、一〇一七年第二月／一六〇八年五・六月の『マバーヒジュ続篇』の記事にも以下のようにある。

この時代のアミールたちの食欲さから起こったことは、以下のとおりである。私はカナーティル・アツィスィバーウのスークにおいて、マクアド・キバーナ Maḡad Qibana（計量のマクアド）に座し、棹秤で計量していた。私はそれを扶養家族の食いつ持（*qūt al-iyāl*）のための助けとしていた。当時の私には、カイロでそれ以外の仕事が無かったのであ

る。そして、ある孤児に帰属する仔馬（*muhṛ*）の二分の一の持分についての契約締結のために一団が私の許にきた。しかし、私は自らのことが心配でそれを拒否した。というのは、カーディー・アスカルたちが計量士組合（*ṭā’ifat al-qabbāniyya*）の全員に對して、このような際に証言すること（*ishhād*）を禁じていたからである。この時、私の許にジャーウィーシーヤ軍（*ṭā’ifat al-Jawshīyya*）のある人物も来ていたが、彼は私の所からインク壺とペンと紙を取ると、この契約締結の二つの文書を、一つ目は売り手、二つ目は買い手のために書いてしまった。そして、彼はそれによって一ニスフを得ると、それで南瓜（*qar*）⁽¹⁰⁾を買い、自宅ですべてを調理したのである。

先述のマクアドがカナーティル・アツィスィバーウ街区のスークにあつて、特に計量業務に使われた都市構造物であつたことが、この記述から明らかである⁽¹⁰⁾。

引用記事中でとりわけ印象深いのは、この歴史家が計量士の仕事を続けた理由を家族の食費を稼ぐためとし、「カイロでそれ以外の仕事が無かった」と自らの真情を吐露している部分である。イスラーム諸学の高等教育に

おける学問修業の経験を持ち、またカイロ史の叙述に情熱を注いでいったイブン・アジャミーにとって、計量という地道な業務は生活上止むを得ぬ選択だったのである。⁽¹⁸⁾

また、契約の締結に関する部分も当該社会の興味深い実態を細密に描き出している。すなわち、公正を旨とする計量士を契約時の証人として求める社会的需要が当時存在しており、このような趣向に対して、州都カイロの計量士組合の統制を担うカーデー・アスカルたち、つまり歴代のエジプト州主席カーデーは、こうした「副業」に彼らが携わることを禁止していたとみられる。これを遵守していたイブン・アジャミーは、マクアドに居合わせた軍人がこの法的な職務に横から飛び付き、そうして稼いだ小銭で南瓜を買い、保存性の高いこの野菜をすぐさま調理したのを目の当たりにし、そのいじましい姿態を揶揄している。またそこには、当世の非上層軍人たちの都市生活者としての家計逼迫も鮮明に映し出されている。

以上のように、一五九一年から一六〇八年に至る時期について、イブン・アジャミーの計量士としての活動の場として当該史料に確認されるのは、カイロ南部に位置

するサイイダ・ゼイナブ界限のカナーティル・アツィスイバウ市場のマクアド、そしてギザ県の農地である。そしてこの期間内に、彼はさらに別の場所にも一時的に逗留している。滞在地はナイルデルタ北部の汽水域ブルッス湖の中心港ブルッルスである。『マバーヒジュ』には、

それから私は、一〇一二年第五月（一六〇三年一〇一一月）にブルッルス港 Thagr al-Burullus へと旅をして、同年第七月一五日（一六〇三年一二月一九日）までそこに滞在していたので、その間にカイロで起きたことの諸情報を私は知らない。⁽¹⁹⁾

とある。二年後の同じ時季、一〇一四年第六月一日／一六〇五年一〇月一四日にもカイロからブルッルスへと移動し、第一〇月一五日／一六〇六年二月二三日まで「私に現れた福利 (maslaha) のために」同港に滞在した。⁽²⁰⁾ さらに、一〇一七年第八月／一六〇八年一二月にも「私に生じた仕事 (shughl) のため」カイロを離れ、同港に寄留した。『マバーヒジュ統篇』に「それからラマダーン月が始まった。新月のその初日は火曜日であったが、ロゼッタの人々、そしてブルッルス港の一部の人々は月曜から斎戒をした。」と記し、また同港でラマ

ダーン月に多くのナツメヤシが倒壊したと述べているので、少なくとも同月まではそこに滞在していたとみてよからう。⁽¹⁸⁾つまり、一六〇三年、一六〇五年、一六〇八年のそれぞれ秋から冬にかけて、イブン・アジャミーは一族の故郷であったブルツルスの港に数か月間滞在し、何らかの職務に従事していたのである。州都での彼の本職は計量士であつたから、この税関の港市においても特殊技能を活かし、また地縁・血縁に頼つて「出稼ぎ」をしていたとみるのが妥当な解釈かと思われる。しかし、地方での仕事を獲得した経緯や職務内容に関する具体的な記事は、残念ながら見出せない。

ところで、カイロの計量士たちは単一の同職組合を成し、エジプト州のカーディー・アスカルの監督下にあり、他の同職組合と同様に組合長が計量士たちを束ねていた。『マバーヒジュ』によれば、一〇一六年第一二月／一六〇八年三―四月、計量士組合長 (shaykh ta'ifat al-qabbaniyya) を務めたドゥバイス Dubays として知られるシャイフ・ムハンマドが死去した。彼は晩年に失明したこと、シハーブッディーン Shihab al-Din とアブドゥッラティーフ 'Abd al-Latif と二人の息子のため同職を辞していた。イブン・アジャミーはさらに次の

ように記している。

彼の任期中に、私は多くの場所で棹桿による計量に従事していた。そして、私にはカナーティル・アツィスィバーウ街区のマクアドに同僚がいたが、この人物とは数多くの喧嘩をした。そうして、私はムハンマド・ドゥバイスのもとに行つて訴えたのだが、彼は当該人物から得た賄賂 (rashwa) のため、私ではなくその人物の方を助けたのである。また、彼は若衆 (adnan) に傾倒していた。⁽¹⁹⁾

組合仲間との度々の諍いに関するこの記事は、カナーティル・アツィスィバーウのマクアドが必ずしも平穏な職場でなかったことを伝えている。そして、組合内部の紛争の解決は組合長の役目であつたが、イブン・アジャミーは、贈賄によつて組合長の公正な判断が損なわれたとし、さらには組合長個人の性癖を指弾する構えまでみせている。

このように批判的なムハンマド・ドゥバイスへの視線とは異なり、次に組合長に就任したシャイフ・ヒドゥル・ブルツルスィー Khidr ibn 'Ubayd al-Burulusi については、『マバーヒジュ続篇』の一〇一七年第三月／一六〇八年六―七月の死亡記事に、以下のような略伝が示

されている。

彼は計量士たちの仕事の技能に秀でており、またインド式算術 (*ilm al-ghubar*)、計時法 (*muqāt*)、その他に熟達していた。彼はブーラクのアイダムル・ハテীরリー集会モスクの計時係 (*mu-waqit*) のシャイフ・ヒジャーズイーからそれ(計時法)を学んだ。彼は、その時代のハナフイー派シャイフでシャイフ・アル・イスラームのアリー・マクディスィー *ʿAlī ibn Ghānim al-Maqdisī* の仲介 (*wasīla*) で、ドゥバイスとして知られるシャイフ・ムハンマドに代わって幸運にもカッバーニーヤの同職組合の長に就任した。⁽¹⁷⁾

計量士としての技能や数理的知識を備えたこの計量組合長に対して、イブン・アジャミーが一定の敬意を抱いていたことがこの記事に窺える。そしてこれに続く記述によれば、ハナフイー学派の有力学者による仲介の対象は、当時のエジプト州カーデー・アスカルのイブン・ブスターン *Shaykh al-Islām Muḥammad ibn Bustān* であった。⁽¹⁸⁾つまり、計量士組合を監督するカーデー・アスカル職の保持者へと繋がる人脈の保持が、組合長に就任するうえで有効だったのである。⁽¹⁹⁾

さらに『マバーヒジュ続篇』の記述によれば、ヒドウル・ブルツルスィーは、組合長就任の前に、前記のシャイフ・ヒジャーズイーの店舗 (*dukkān*) やアイダムル・ハテীরリーのスークで働いていたという。つまり、この組合長はアイダムル・ハテীরリー集会モスクの界限を活動の場としていたのであり、イブン・アジャミーからすれば近い同業者であったと推察される。しかしながら、ヒドウル・ブルツルスィーは同職を失うことになる。その事情に関する『マバーヒジュ続篇』⁽²⁰⁾の記事には紙葉の汚損によつて判読不能の箇所があるが、『マバーヒジュ』に同様の説明がなされている部分があるので、それに依拠すれば、以下のとおりである。すなわち、ヒドウルはその後短期間組合長の職にあったが、イブン・ブスターンがカーデー・アスカル職を解かれると、ムハンマド・ドゥバイスが組合長職への再任を求め、計量士組合の有力者たち (*akābir al-tāʾifat al-qabāniyya*) に働き掛け、ヒドウルの追い落としをかけた。そして、イブン・アジャミーは次のように記している。

彼(ヒドウル)には偽造銀貨の鍛造 (*ḍarb al-fidda al-ṣaḥīḥa*) をめぐつての悪評があった。そして、偽造通貨を所持してサーガ(金銀宝石商街)のある小

売商からの購入にそれを用いたある娘を、警察の一団 (jama'at al-shurta) が逮捕するということが起こった。彼らは、彼女に拷問することを示唆してその銀貨が何処から来たのかを語らせ、彼女はそれがヒドゥルからのものであると自白した。そこで、警察長官 (sahib al-shurta) は彼 (ヒドゥル) を逮捕し、彼らのもとで牢に入れて、彼から罰金を取り、その後、釈放した。こうして、カイロでは彼についてのそのことが噂として広まり、彼は計量組合長の職から解任され、ムハンマド・ドウバイスが組合長職に再任された。⁽¹⁷⁶⁾

事の真相については棚上げするとしても、公正を旨とした計量士の組合長という責任ある立場に鑑みれば、偽造銀貨事件での逮捕は大失態として州都の市場社会に受け止められたに違いない。ちなみに、その前月の一〇一七年第二月／一六〇八年五月六月には、カスル・アイニー al-Qasr al-'Ayni の隣にある修道場 (takiyya) とカイロ城の北門へと至る傾斜地のスーワ Suwwa にある修道場 (takiyya) の管財人であったスーフイーのアフマド al-Darwish Ahmad が、金貨や銀貨を偽造したとして、やはり警察長官によって逮捕される事件が起こっていた。⁽¹⁷⁷⁾

この事件との関連は明らかでないが、通貨の偽造が州都で問題化した時期であったことも踏まえる必要がある。ヒドゥル・ブルッルスィーのその後の動きについても次のような記事がある。

この不幸が前述のヒドゥルに起こった時、彼は自身に生じた不名誉からカーヒラに留まらず、イスタンブルへと旅立ち、そこにある期間留まった。そして彼は自らが医師であると主張し、何人かを治療したのである。それからかの地で別の出来事があり、彼は叱責を浴びることになった。しかし、執り成しをする者があり、彼はロゼッタ港へと帰還し、そこにある期間留まり、計量士たちとその扶養者たちの状況改善、またその地のウイカーラでの計量に専念した。それから、彼はカーヒラへと帰還した。若い頃の彼は父親と共に船で旅をし、穀物の商いをしていた。そして、彼はブラークの家々の窓の下を歌いながら巡っていた。彼は美声の持主であった。⁽¹⁷⁸⁾

イブン・アジャミーは、穀物商人・計量士・医師と巧みに職業を替え、カイロ・イスタンブル・ロゼッタなどを舞台に波乱万丈の人生を歩んだこのブラークの怪漢を見放すことなく、むしろ好奇の眼差しを向けている。計

量士組合長の両名は、いずれも倫理的・法的に問題視され得る人物だったといえるが、イブン・アジャミーは、したたかに生きたヒドウル・ブルツルスィーの方に、おそらくは同じ界限の住人ということも手伝って、ある種の愛着を抱いていたようにみえるのである。

二人の計量士組合長についての以上のような『マバーヒジュ』及び『マバーヒジュ続篇』の自由闊達な記述は、計量士組合員のリーダー観を映し出しているという点でも貴重であろう。そして、そこでの指摘はまた、計量士組合長の職をめぐる賄賂・コネ・世襲が常態化していた当時の世相を伝えているのである。

また、『マバーヒジュ続篇』には、ヒドウル・ブルツルスィーの死から約二か月後の一〇一七年第五月／一六〇八年八月九月に亡くなった、ハルク門地区 *Khut Bab al-Kharq* の有力計量士のムハンマド・スカイカル *Muhammad Sukaykar al-Qabbani* に関する記事もみられる。この人物は、同地区にあるイスカンダル・パシャ集会モスク *Jami' Iskandar Pasha* の現場管理人 (*mubashir*) やその他の諸職を務めていたが、次のように記されている。

彼の許には多くの計量士たちがいた。そして、彼は

自らの店舗 (*dukkān*) で多数の者たちを育て、彼らに棹秤を用いた計量技術を教えていた。また、特に計量士たちとその扶養者たちの状態の改善に功を成したが、そのことで彼は計量士組合長と競合していた。彼は生前にハルワティーヤ教団に属するシャイフ・カリームの、大きなドームを頂く修道場の形をとった墓廟の傍らに墓を設けていた。そして、彼はそこに埋葬された。この墓の上には居住用の家々 (*buyūt*) が設けられ、この住居はシャツク・アツ＝スウバーン *Shaq al-Thubān* として知られた。⁽¹⁹⁾

この記事から、計量士組合長の職に就くことはなかったが、多くの計量士を養成して彼らを束ねる有力計量士もいたことが分かる。ここでの「店舗」は計量士事務所であつたようにもみえる。また、その墓をめぐる記述から、この人物が一定の資産を保有していたことを読み取ることができよう。

そして、先述のとおりイブン・アジャミーはカナーン・イル・アツ＝スイバーウのマクアドの同僚と不仲であつたが、『マバーヒジュ』には同業者との友好的関係を伝える記述も確認される。一〇一六年第七月一日／一六〇七年一〇月二二日、イブン・アジャミーは、ダルブ・ア

ル＝ファワーヒール街区 Khut Darb al-Fawakhir の計量士であったアブドゥルカーデイル・イブシャイヒー・Abd al-Qadir al-Ishayir の許を訪れ、その兄（または弟）のアブドゥッラフマーンの死亡に関する話に耳を傾けた。アブドゥッラフマーンは、カナートイル・アッ＝スィバーウの近くのウマルシャー橋 Qanlarat Umar Shah の向かいに位置したカーデー・カトクト学院 Madrasat al-Qadi Katkut で、説教師の代理を務めるなど宗教的実践に励みつつ、ナイルデルタ産綿花の取引にも従事していた富裕な商人であり、『マバーヒジュ』に詳しい関連記述が残されている。このように、イブン・アジャミーが個人的に親交を結び、家を訪問する間柄の計量士もいたのである。

さらに付言すれば、前記のように、『マバーヒジュ続篇』のヒジュラ暦一〇一八年第一月／一六〇九年四月以降の記事には、州総督オキユズ（クル克蘭）・メフメト・パシャとカイロのムフタスィブ（muhfasib al-Qahira）のムハンマド・アーガールの市場行政とズルム（圧政）に対するイブン・アジャミーの批判文が所々に確認されるが、その中にはムフタスィブと計量士組合との間の葛藤に関する縷述もみられる。⁽⁸⁾ この問題について

は、稿を改め、「エジプトの第二の征服」を実現したとされるこの著名なエジプト州総督の統治の功罪を吟味しながら詳論してみたい。そこでは、アブドゥッラヒームが一九七〇年代後半に校訂した、バクリーとブルツルスィーによる二つの関連史料⁽⁹⁾との比較対照が主な作業となるだろう。

おわりに

以上、現時点でアラビア語の自筆稿本のみが確認されている『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』の記述の概要をまとめ、カイロ年代記としての性格と重要性について検討したうえで、この二つの史料の記事分析から、家族関係、居住・勤務空間としての河港ブーラク、計量活動の三点に的を絞り、イブン・アジャミーという経済的中層に位置する「知的市民の歴史家」について、その実像を明らかにすべく努めてきた。特に重要と思われる諸点を繰り返すならば、家族については、年代記の情報源でもあった父親の怨恨による刺殺事件が彼の人生の画期をなす一大事であったとみられる。ブーラク港については、父の家の在ったハティリー集会モスク界限と勤務先の巨大複合施設スィナーニーヤという二つの場

が、州都空間におけるイブン・アジャミーの視座の中心的な立脚地であった。また、一五六〇年代初頭生まれと推定される彼は、十代後半からスイナーニーヤの商館で計量業務に従事し、一五九〇年代から一七世紀初頭にかけてカイロ南部のカナーティル・アツィスィバーウを中心に、ギザ県、さらにおそらくはナイルデルタのガルビーヤ県の税関都市ブルッルスにおいて計量士として活動していた。そして、カイロの計量士組合に属し、そこでの人間関係が彼の公私の生活にとって肝要であった。

『マバーヒジュ』の執筆開始の時点を確認することはできないが、イブン・アジャミーは、一六一〇年頃から一六二〇年代末にかけて『マバーヒジュ』とその続篇の稿本を執筆していたとみられる。そしてそのかなり前から、カイロやその他で計量士としての仕事に励みながら、膨大な量の草稿を覚え書きとして溜め続けていたのである。

以上、本稿は一六世紀から一七世紀への動乱転換期の州都カイロに生を営んだ、計量士のエジプト史記述者に関する基礎的な研究の一環を成すものである。続く拙稿では、イブン・アジャミーの学問修業、カラーファ参詣などのイスラーム的な信仰実践、ウラマー・スーフ

イー・聖者への眼差しや彼らとの交流などに照準を合わせ、再び『マバーヒジュ』の正統両篇を中心史料として新たな究明を目指したい。

註

- (1) Ibn al-Ajami, *Mabāḥiṣ al-ihwān wa manāḥiṣ al-ḥil-lan fi ḥawāṣiṭ al-duḥur wa al-aḥwān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A1631. [イブン・マバヒス・アル・イフワン]
- (2) Ibn al-Ajami, *Taṭrīb al-Uḥmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A1632. [イブン・タトリブ・アル・ウフマン]
- (3) ヤーシエンに「ふじ詳」は、Helmut, Claus (ed.), *Ulrich Jasper Seetzen, 1767-1811: Leben und Werk*, Gotha: Forschungs- und Landesbibliothek, 1995 を参照 (S. 22)。
- (4) Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, Supplementband, Leiden: Brill, 1938, p. 410; Fuat Sezgin, *Geschichte des arabischen Schrifttums*, Band I, p. 490. ブロッケルマンは、彼の名前の一部である al-zāḥiyya を al-zāḥid と誤読している。他方、ゼツギンは、シャーフイー学派の始祖の詩に関するイブン・アジャミーの著書 *Natījat al-afkar fi mā yu'za tū al-Imām al-Shaḥfī min al-ash'ar* の写本 (カイロ・エジプト国立図書館所蔵) にも言及している。この写本の検討は今後の課題としたい。また、オスマン朝期カイロに存在した複数のイスラーム

法廷のスイジッル（台帳）、特にブーラクの法廷台帳に
関連の記述が残されている可能性があるが、その探索に
は多くの時間を要すると予想される。これも将来の課題
とした。

- (5) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 307v.
- (6) バドゥアー・マフムディーヤにうつす Catherine
Mayer-Jaouen, *Al-Sayyid Ahmad al-Badawi: Un grand
saint de l'Islam Égyptien*, Cairo: IFAO, 1994 を「カ
ラー」参詣については大検哲也『エジプト死者の街と聖墓
参詣—ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史』山川出
版社、二〇一八年を参照のこと。
- (7) その画期となったのは、オスマン朝期エジプト史研究
の開拓者アブドゥッラヒームによる「社会・文化情報」の
年代記の校訂（Ahmad Shalabi, *Awḍāḥ al-ishārāt
fi man taʿallā Miṣr al-Qāhira min al-wuzarāʾ wa al-
bashaʾ*, Cairo: Maktabat al-Khānī, 1978）。
- (8) Daniel Crecelius, *Eighteenth Century Egypt: The Ara-
bic Manuscript Sources*, Claremont: Regina Books, 1990.
Nelly Hanna, "The Chronicles of Ottoman Egypt: History
or Entertainment?", in Hugh Kennedy (ed.), *The His-
toriography of Islamic Egypt (c.950-1800)*, Leiden: E. J.
Brill, 2001, pp. 237-250.
- (9) Michael Winter, "Historiography in Arabic during the
Ottoman Period", in Roger Allen and D. S. Richards
(ed.), *Arabic Literature in the Post-classical Period*,

Cambridge: Cambridge University Press, 2006, pp. 173-
174. など「バクリー」に関し「Laylā ʿAbd al-Latīf
Aḥmad, "Ibn Abī al-Surūr al-Bakrī: ʿAsṭ-hu wa muʿal-
latāḥ-hu", *Dirāsāt fi taʾrīḥ wa muʿarriḥi Miṣr wa al-
Shām ibbāna al-ʿasr al-ʿUḥmānī*, Cairo: Maktabat al-
Khānī, 1980, pp. 129-147 を詳し」など二〇一九年に
公表した Adam Sabra, "al-Bakrī, Ibn Abī l-Surūr", *The
Encyclopaedia of Islam*, 3rd edition は新知見を披露し、
法廷台帳の記録から歿年月を絞り込んでいる。

- (10) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 164r.
- (11) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 1r-1v.
- (12) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 1v-30r.
- (13) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 30r-39v.
- (14) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 39v-45v.
- (15) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 45v-56v.
- (16) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 56v-307v.
- (17) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 307v-308r.
- (18) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 1r. サハーウィーはハナフィー
学派ではなくシャーフイー学派の学者であり、また彼
の個人名はアリーではなくムハンマドであった。イブ
ン・アジヤミーのサハーウィーに関する知識の不足は明
白である。
- (19) サハーウィー『輝く光』にうつす Carl F. Petry,
"al-Sahāwī, Shams al-Dīn Abū l-Khayr Muḥammad b.
ʿAbd al-Rahmān al-Shāfiʿ", *Encyclopaedia of Islam*, 2nd
edition; Bernadette Marek-Thouman, "Le dictionnaire

- biographique, un outil historique (Étude réalisée à partir de l'ouvrage de Saḡāwī: ad-Daw' al-lāmi fī a'yan al-qarn al-rāṣi'), *Cahiers d'onomastique arabe* 1988-1992. Paris: CNRS Editions, 1993, pp. 9-38 を参照のこす。
- (20) E. M. Sartain, *Jalāl al-Dīn al-Suyūfī*, 2vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1975, vol. 1, pp. 72-75. なすサートーンが依拠したヒンズー国立図書館所蔵の写本 (Dar al-Kutub, Adab, 1510) の書名は *Al-Kāwī 'alā ta'rīkh al-Sahāwī* である。
- (21) Sartain, *Jalāl al-Dīn al-Suyūfī*, vol. 1, pp. 75-77.
- (22) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 1r.
- (23) *Mabāḥij al-iḥwān*, fols. 1v-2r.
- (24) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 1r. イブン・イヤースの年代記記事にみれば、セリム一世のカイロ入りは九二三年第一月三日／＼五十七年一月二十六日のこととされた (Ibn Iyas, *Badā'i' al-zuhūr fī waqā'i' al-duḥūr*, 5vols., Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1960-1975, vol. 5, p. 150)。
- (25) イブン・ムシヤールは、ナヘル水位計測官の重職を九世紀以来独占するアブー・マッシラッター家の成員 (ba'd awlād Ibn Abī al-Raddād) との間に交友関係を結べた (*Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 12r.)。
- (26) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 2r. 聖者ジャリリーにこそつた Jean-Claude Garcin, "Deux saints populaires du Caire au début du XIV^e siècle", *Bulletin d'études orientales*, 29 (1977), pp. 131-143 を参照のこす。
- (27) 州総督の任期の開始と終ったことは、諸年代記間に異同が認められるが、本表では全てイブン・アジヤミーの記述に基て示した。
- (28) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 6.
- (29) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 7. イエメン州総督時代の圧政に端を発したとみられるマフムト・ムシヤの殺害につづつた Doris Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Wayf and Architecture in Cairo (16th and 17th Centuries)*, Leiden: E. J. Brill, 1994, pp. 42-43 を参照のこす。
- (30) 一五六七年竣工のマフムト・ムシヤ・モスクの建築にこそつた Doris Behrens-Abouseif, *Islamic Architecture in Cairo: An Introduction*, Leiden: Brill, 1989, pp. 160-161 を参照のこす。
- (31) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 13r.
- (32) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 12r. 宦官に対する畏怖感情 (ḡayba) こそつた Shaun Marnon, *Eunuchs and Sacred Boundaries in Islamic Society*, New York: Oxford University Press, 1995, pp. 63-70 を参照のこす。
- (33) 同家とナイロメーターに関しては、拙稿「イスラーム都市の食糧騒動——マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』六二二号 (一九九〇年)・二二二二三・二九頁を参照された。
- (34) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 14.
- (35) *Mabāḥij al-iḥwān*, fol. 14v. awlād al-'Arab こそつた Jane Hathaway, "The *Evil*-i-'Arab (Sons of the Arabs) in Ottoman Egypt: A Rereading" in Colin

- Imber and Keiko Kiyotaki (eds.), *Frontiers of Ottoman Studies: State, Province, and the West*, 2 vols., London: I. B. Tauris, 2005, vol.1, pp. 203-216. Michael Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule, 1517-1798*, London: Routledge, 1992, pp. 45-47 を参照 (シム)。
- (36) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 14v-15r.
- (37) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 15r.
- (38) 一八世紀エジプトにおけるウラマーによるマムルークの保有については、Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule*, pp. 68-70 を参照 (シム)。
- (39) *Mabāhiy al-ikhwān*, fols. 15v-16r.
- (40) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 17v.
- (41) *Mabāhiy al-ikhwān*, fols. 17v-18r.
- (42) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 18, ㉞の「小型銀貨」が何を指すのかについては検討を要する。
- (43) *Mabāhiy al-ikhwān*, fols. 17v-21v, ㉞のパシヤの任期に関する本史料の記事内容については総合的な検討が必要であろう。同様に濃密な関連記述がみられるヤヴス・アリー・パシヤ (在任一六〇一-一六〇三, No. 28) については、拙稿「一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式」『史学』八八・二 (二〇一九年)、「二一九頁を参照されたい。
- (44) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 25r.
- (45) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 28.
- (46) *Mabāhiy al-ikhwān*, fols. 29r-30r.
- (47) これに先立つ記述の中でこの人物は州総督として扱わ

計量と歴史記述

- れており、齟齬がみられる。
- (48) この軍人については、㉞に至って初めて言及されている。
- (49) ㉞での「三七名」はこの四名の臨時代理職就任者を含めた延べ人数と考えられるが、(p) のハージー・ベイは何故か㉞で言及されていない。
- (50) 「カスム・パシヤの後に任じられたイブラヒム・パシヤ」がサドラザム・イブラヒム・パシヤ (No. 5) を指すならば、彼は在任中に死去したのではなく、一五三六年にイスタンブルのトップカプ宮殿の自室で絞殺された (M. Tāyīb Gökbulğın, "Ibrāhīm Pasha", *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition)。
- (51) Ibn Abī al-Surūr al-Bakrī, *Al-Mināḥ al-raḥmāniyya fī ta'rikh al-dawla al-'Uthmāniyya*, Damascus: Dār al-Bashā'ir, 1995 [㉞], *Al-Mināḥ al-raḥmāniyya*, pp. 169-173. Id., *Al-Nuḥḥa al-zahiriyya fī dhīr wulat Mīṣr wa al-Qāhira al-mu'izziyya*, Cairo: al-'Arabi li-al-Nashr wa al-'awṣi, 1998 [㉞], *Al-Nuḥḥa al-zahiriyya*, pp. 145-148. 他方、イスハークーはシャヒン・パシヤの任期を九六八年三月二日／一五六〇年一月二日ー九七一年六月二日／一五六四年二月三日とし、ソフ・アリー・パシヤの任期についてはバクリーと同じ日付を記している (Al-Iṣṣāqī al-Munūṭi, *Kitāb al-ḥabbar al-uṣul fī manāṣarrafā fī Mīṣr min arbāb al-duwal*, Cairo, 1276 A. H. [以下、*Akḥbar al-uṣul*], pp. 324-325)。
- (52) *Mabāhiy al-ikhwān*, fol. 29r.

- (53) *Akhbar al-uwal*, pp. 360-363. バクリーも同様に任期の開始を一〇二〇年第八月二二日とし、終了については一〇二四年第三月とし、日付を示さずに「火曜日」と記した。(Al-Minh al-raḥmānīya, p. 318; Al-Nuḥa al-za-hīya, p. 190)。
- (54) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 30r-31r.
- (55) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 31r.
- (56) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 31r, 33r.
- (57) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 30, 32r-33r, 34r.
- (58) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 31r-32r, 33r-39v. 特に、皮鞆工房のカイロ西部地域への移転問題に関する記述は、従来の理解に修正を迫る具体的内容を備えている。カイロ西部地域の発展については稿を改めて検討したい。
- (59) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 39v-40r. 当該期のマジユース型聖者については、ダマスクス州の事例に関する考察ではあるが、拙稿『夜話の優美』にみえるダマスクスのマジユース型聖者」山本英史編『アジアの文人が見た民衆とその文化』慶應義塾大学言語文化研究所、二〇一〇年、二二二-二三四頁を参照された。
- (60) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 40r-41r.
- (61) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 41r.
- (62) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 41v-43r.
- (63) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 43r-44v.
- (64) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 44v-45v.
- (65) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 45v. 上の聖者に関する情報は欄外追記のかたちで示されている。
- (66) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 45v-47r.
- (67) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 47r-50r. この人物の名は何故か記されていないが、単なる記載漏れかもしれない。
- (68) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 50r-51r.
- (69) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 51r-52r.
- (70) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 52.
- (71) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 53r.
- (72) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 53r-55v. 詳述されているこの人物は、マムルーク朝末期の重要聖者イブラーヒーム・マトフリー(一四七二歿)の子孫であった。イブラーヒームについては、拙稿「中世エジプト都市の救貧—マムルーク朝スルタンのマドラサを中心に」拙編『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、六八-七九頁を参照された。
- (73) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 55v-56v.
- (74) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 56v-61r.
- (75) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 61r-62r.
- (76) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 62.
- (77) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 62v-63v.
- (78) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 63v-64r.
- (79) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 64r-65r.
- (80) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 65r-66r.
- (81) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 66.
- (82) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 66v.
- (83) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 66v. 著者は、ヴェネツィアとフランスのどちらの領事であったかは不明としている。

- (74) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 66v-67r.
 (75) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 67r.
 (76) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 67r-68r.
 (77) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 68r.
 (78) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 68v-117v.
 (79) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 307v. 欄筆日が預言者イブン・マシヌールに金曜日に示されたことを注目に値する。
 (80) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 308r.
 (81) Peter M. Holt, "Al-Jabarti's Introduction to the History of Ottoman Egypt", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 25/1 (1962), pp. 38-39.
 (82) Jane Hathaway, "Sultans, Pashas, Taqwims, and Mithimes: A Reconsideration of Chronicle-Writing in Eighteenth Century Ottoman Egypt", in Daniel Crecelius (ed.), *Eighteenth Century Egypt: The Arabic Manuscript Sources*, Claremont: Regina Books, 1990, pp. 51-60.
 (83) Hathaway, "Sultans, Pashas, Taqwims, and Mithimes", pp. 60-65.
 (84) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 2r.
 (85) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 2v. なお、その中に、マフディー学派の法官ディヌーシヤリー 'Abd Allah al-Dinshari が作ったこの修繕工事に関わる二篇の詩について、「私はそれらを『オスマン朝の記述における煌光の書 *Kitāb al-Anwār al-mudī'a fī dhikr al-dawla al-'Uthmāniyya*』に記した」との一文がある。イブン・アジャミーの手になる別の史書が存在が言及されており

注目される。

- (86) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 2v.
 (87) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 3.
 (88) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 3v.
 (89) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 3v-38v.
 (90) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 6r.
 (91) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 84v.
 (92) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fols. 39v-40v, 43v-45r, 48v, 62v-63r, 67r, 67v-69v, 73r, 79v, 83r-84v.
 (93) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 5r.
 (94) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 7r. マーラーブの史書に關して Paul Walker, *Exploring an Islamic Empire: Fatimid History and its Sources*, London: I. B. Tauris, 2002, p. 145 を参照。
 (95) *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 39r. カンタラのバブルにの商館におけるチーズの取引に關連して言及されている。同書の刊本に Al-Maqriẓi, *Al-Mawā'iz wa al-i'tihār fī dhikr al-fihriyat wa al-āthār*, 5 vols., London: Mu'assasat al-Furqān li-al-Turāth al-Islāmī, 2002-2004 を参照。
 (96) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 5v-6r; *Dhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 43v. 同書の刊本に Al-Suyūṭī, *Kawakib al-ra'ada fī ta'rīkh al-Nīl wa Jazīrat al-Ra'ada*, Cairo: Dar al-Āfaq al-'Arabiyya, 2002 を参照。
 (97) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 30r.
 (98) 以上 *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 7v. これに続けてイブン・アジャミーの父がこの州総督の料理人から聞いた情

報として、ある時に卵一〇〇個とチーズ五ラトルを平らげたというマフムト・パシヤの大食漢ぶりを伝える逸話を紹介している。

- (109) Avner Giliadi, "Saghir", *Encyclopedia of Islam*, 2nd edition.
- (110) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 30v.
- (111) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 32r.
- (112) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 86v-87r.
- (113) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 32.
- (114) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 32v.
- (115) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 32v-33r.
- (116) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 30r.
- (117) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 30v.
- (118) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 47v.
- (119) Nelly Hanna, *Un Urban History of Būlāq in the Mamluk and Ottoman Periods*, Cairo: IFAO, 1983, pp. 2-7, 16-17; Jean-Claude Garcin, "La 'méditerranéisation' de l'empire mamlouk sous les sultans bahrides", *Rivista degli studi orientali*, vol. 48 (1973-1974), pp. 109-116.
- (120) Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, pp. 27-29.
- (121) Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, pp. 35-38, 65-83.
- (122) テーラーの空間構成については、Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, pp. 63-83 に詳しい。同モスクの位置は Ibid, p. 73, Fig. 11, No. 24 によって示されている。
- (123) Al-Maqrizī, *al-Mawāʿiẓ wa al-iʿtibār*, vol. 4/1, pp. 251-254.
- (124) 一三三〇年代に権勢を振るったこの財務官僚については、Donald P. Little, "Notes on the Early *Naẓār al-Khāss*", in Thomas Philipp and Ulrich Haarmann (ed.), *The Mamluks in Egyptian Politics and Society*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, pp. 235-253; Amalia Levanoni, "The al-Nashw Episode: A Case Study of 'Moral Economy'", *Mamluk Studies Review*, 9/1 (2005), pp. 207-220 を参照のこと。
- (125) *Dhawl mābāḥij al-ikhwān*, fols. 63v-64r.
- (126) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 203r.
- (127) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 11v-12r. なお、イスハーキーは着任日を九八八年五月二六日／一五八〇年七月一日、退任日を九九一年四月二三日／一五八三年五月一六日 (*Akhbār al-awāl*, pp. 329-330) 、他方、バクリーは着任日を九八八年五月一六日、退任日を九九一年三月二日としている (*Al-Minhaj al-rubūʿiyya*, pp. 235-236; *Al-Nuḥba al-zahiriyya*, p. 159) 。なお、引用記事における「物価高」の発生時期や実態は不明である。
- (128) スイナハ・ペンヤ・モスクとスイナーニーヤについては、Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, pp. 200-202 を参照のこと。ベレンス・アブーヤイフは、スイナーニーヤをマムルーク朝末期のカイロ西部市域におけるエズベキヤに比肩する規模の都市計画とみている。
- (129) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 7v-10v.
- (130) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 7v-8r. イスハーキーは任期を

九七五年八月二三日／一五六八年二月二三日から九七六年第六月二三日／一五六八年二月一三日までとし(Akhbar al-uwal, pp. 325-326)。¹³¹ バクリーは『慈悲深き神の贈物』においてイブン・アジャニールと全く同じ日付を記し(AI-Minh al-rahmāniyya, pp. 202-203)。¹³² 他方『壮麗な散策』では退任日については九六七年第六月一日(Al-Nuzha al-zahīyya, pp. 152-153)。¹³³

- (131) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 11r. イスハークは任期の始まりを同じ日としながら、退任日を明記しておらず(Akhbar al-uwal, pp. 326-327)。¹³⁴ 他方バクリーの二つの年代記では、開始日がイブン・アジャニールと同じだが、前後関係からみる限りおそらくは誤記によって九八一年第一二月三〇日／一五七四年四月二二日までとされている(AI-Minh al-rahmāniyya, pp. 204-206; Al-Nuzha al-zahīyya, pp. 154-155)。

- (132) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 8r. 上の記述は、一五六〇年代初頭にこの著者が生まれたという先の推定と整合的である。ペーレンス＝アブーセイフによれば、同モスクの建立は一五七一年であった(Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, p. 201)。

- (133) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 8r. スイナン・モスクの建築の特徴については、Doris Behrens-Abouseif, *Islamic Architecture in Cairo: An Introduction*, Leiden: Brill, 1992, pp. 161-162を参照の事。

- (134) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 8. 九九六年第三月二〇日／一五八八年二月一八日の日付をもつスイナーニーヤのワクフ

証書と比べると、各職員の数に異同がみられる。Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, pp. 201-202を比較参照の事。

- (135) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 8v-9r. ハンナーの研究によれば、¹³⁵ 大きな商館がスイナン・パシャ・モスクの北側、小さな商館が同モスクの東側、カイサーリーヤが大きな商館の東側にそれぞれ隣り合っていた(Hanna, *An Urban History of Būlāq*, p. 93)。¹³⁶ そして、販売所であるカイサーリーヤは「スイナーニーヤのスーク Süq al-Sināriyya」とも呼ばれた(Hanna, *An Urban History of Būlāq*, p. 49)。

- (136) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 9. スイナン・パシャの当該ワクフの管財人については、設立者のスイナン・パシャがまず務め、彼の死後はイスタンブルのシェイヒュルイスラムが担い、カイロにはその代理のムタワッリーが任命された(Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, p. 201)。¹³⁷ 上のムバーシルは上のムタワッリーを指すと考えられる。

- (137) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 9v-10r. なお、当該部分のイブームの手当については空欄になっており、調査後に書き込もうとしてそのままになったとみられる。

- (138) 詳しくは、拙稿「十七世紀初頭カイロのハワージヤー『ペバーヒジュ』とその続篇による覚書」「日吉紀要人文科学」第三五号(二〇二〇年)、「二八二―二八三頁を参照された。

- (139) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 9v-10r.

- (140) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 9v.
 (141) オスマン朝期のブルッルス港税関に関しては、*Ṣalāḥ Ahmad Harṭī, Dirṣa 'an ba'd jumarik Miṣr fī al-qam al-ṭhamin 'ashar (al-Iskandariyya, Dimyā, Rushd, al-Burulus)*, Alexandria: Dar al-Ma'rifa al-Jam'iyya, 1989, pp. 18-19 及び Stanford J. Shaw, *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt*, Princeton N. J.: Princeton University Press, 1962, p. 113 を参照のこと。
 (142) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 10r.
 (143) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 10.
 (144) っのほかにイブン・マジャリーは、アレクサンドリア・ロゼッタ・スエズの諸港でのスイナン・パシヤの建設活動に触れ、スエズの集会モスクやサビール、巡礼と香辛料交易の拠点となる大きな商館 (wikāla kabira) について説明し、またシリアの街道上の大規模ハーン (khan 'azim) の建設について述べている (*Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 10v.)。
 (145) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 10v.
 (146) Hanna, *An Urban History of Būlāq*, pp. 90-98.
 (147) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 167v.
 (148) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 272.
 (149) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 272v.
 (150) *Diḥayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 58.
 (151) 因みに、当該期カイロの計量士による執筆活動としては、ハファーンギー Shihāb al-Dīn Ahmad al-Khaṭā'ijī (一六

五九年歿) の詞華集『智者たちの目録 *Rayḥānat al-ibbā'*』に取り上げられている二人のカイロのカッパニーの詩人、アフヤーリー Muḥammad al-Abyārī al-Qabbānī イブン・アル＝ンテューン Yalā'a ibn al-Khaṭīb al-Qabbānī 註目に値する (Al-Khaṭā'ijī, *Rayḥānat al-ibbā' wa zahrāt al-ḥayāt al-dunyā*, 2vols., Cairo: Maḥab at 'Isā Ḥalabī, 1967, vol. 2, pp. 128-132, Nelly Hanna, *Artisan Entrepreneurs in Cairo and Early-Modern Capitalism (1600-1800)*, New York: Syracuse University Press, p. 54.)。

- (152) André Raymond, *Artisans et commerçants au Caire au XVIII^e siècle*, 2 tomes, Damas: Institut français de Damas, 1973-1974, p. 275. 中東史における計量に関することについて E. Ashtor and J. Burton-Page, "Makāyil", *Encyclopedia of Islam*, 2nd edition を参照のこと。
 (153) Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 275.
 (154) Nelly Hanna, *Making Big Money in 1600: The Life and Times of Isma'il Abu Taqiyya, Egyptian Merchant*, New York: Syracuse University Press, 1998, pp. 66-67.
 (155) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 65r.
 (156) Heinz Hahn, *Ägypten nach den mamlukschen Lebensregistern*, 2vols., Wiesbaden: Reichert, 1979-1983, vol. 1, p. 240. っの村は同県のブーラーク・アッ＝タクルールから約三キロメートル西方に位置していた。マムルーク朝のタワターールのジャーニー・ベクについて、Richard T. Mortel, "Grand Dawādār and Governor of Jeddah: The

- Career of the Fifteenth Century Mamluk Ġanibek al-
-Zahrī, *Arabica*, 43-3 (1996), pp. 437-456 を参照 (シム)。
- (157) *Ḍhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 28v. なほ、当地になけり
四ラトルがカービラの重量では五ラトルに相当する、な
らう計量士ならぬはの指摘もあり、注目され。
- (158) 例へば、*Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 73r, 138r; *Ḍhayl mabāḥij
al-ikhwān*, fol. 68v-69r, 77v-78v など。
- (159) サイイダ・ゼイナブ聖廟を中心としたこの界限は、当
該期における経済活動の中心であったカーヒラと南の河
港フスタートを繋ぐ機能を果たしていたと推測されるが、
その市場的性格については、レイモンによる若干の言及
に限られており (Raymond, *Artisans et commerçants*, pp.
312, 314, 336, 353, 363) 未解明なところ。
- (160) André Raymond, *Cairo*, Cambridge & London: Harvard
University, 2000, p. 265, Map 10. ただし、こうした理解
は18世紀前半の法廷史料を用いたハンナーの研究に基づ
いており、当該期がそうであったと現段階では断定でき
ない。
- (161) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 233v.
- (162) *Ḍhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 6.
- (163) 中世から近世にかけてフィレンツェ、ピサ、アンコー
ナといったイタリア半島の諸都市で織物などの取引所と
して用いられたロッジャ (loggia) と、同時代のエジプ
トのマクアドとの形態・機能面の比較史的な考察も今後
の課題といえよう。商業用のロッジャについては、Lau-
ren Jacobi, "An Anachronism of Trade: The Mercato

- Nuovo in Florence (1546-1551)", in Patrick Haughey
(ed.), *A History of Architecture and Trade*, Milton:
Routledge, 2018, pp. 128-141. Olivia Remie Constable,
*Housing the Stranger in the Mediterranean World: Lodg-
ing, Trade, and Travel in Late Antiquity and the Middle
Ages*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003, pp.
154-157, 186-189 を参照 (シム)。
- (164) *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 50r, 52, 53r. 学師や学習内容
などの詳細は稿を改めて論じる。
- (165) 遺産管理台帳を用いた P・ガザールの研究によれば、
一八〇年前後に死去した二人の計量士の遺産総額はそ
れぞれ二万一千七百二十万八千六百七十五フであ
り (Pascate Ghazaleh, *Masters of the Trade: Crafts and
Craftspeople in Cairo, 1750-1850*, Cairo: The American
University in Cairo Press, 1999, p. 138) 後代のデータ
ではあるが、ある程度の資産形成も可能な職業であつた
といえる。
- (166) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 129r.
- (167) *Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 173v.
- (168) *Ḍhayl mabāḥij al-ikhwān*, fol. 28v. 上の記述はラベター
ンの開始の「地域差」を指摘している点でも注目される。
(169) ただし、製粉所・砂糖精製所・製油所などでは私的に
雇用される計量人も存在したようである (Hanna, *Arti-
san Entrepreneurs in Cairo*, pp. 64-65)。また、イギリス
占領下アレクサンドリアの事例 (一八八七年) ではある
が、計量士たちは時に団結して不当な課税に対して抗議

行動を起す」ともあった (John T. Chalcraft, *The Striking Cabbies of Cairo and Other Stories: Crafts and Guilds in Egypt, 1863-1914*, Albany: State University of New York Press, 2004, pp. 146-147)°.

- (170) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 40r: Ghazaleh, *Masters of the Trade*, p. 94. なお、一九世紀中葉にのこった計量士組合の内規の存在を確認やれよう (Ghazaleh, *Masters of the Trade*, p. 30)°.

- (171) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 288.

- (172) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 10v.

- (173) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 40v にあられる。なお、タメスキスのマニッバーによる伝記記事は、イブン・ブスターン Muhammad ibn Muṣṭafā al-Rūmī は一〇〇六年第八月四日／一五九八年三月一二日にイスタンブルで死去した (Al-Muḥibbī, *Khulāṣat al-aṭhar fī a'yān al-qarn al-hādī 'ashar*, 4 vols., Cairo: Dār al-Kitāb al-Islāmī, n.d., vol. 4, pp. 223-224)°.

- (174) 因みに、近代カイロにおける職人たちの異議申立てを多面的に活写した J・T・チャルクラフトの研究は、ナイルデルタのダカフリーヤ県における計量士組合長の解任をめぐる一八七九年の紛争事例について詳論している。Chalcraft, *The Striking Cabbies of Cairo and Other Stories*, pp. 96-97 を参照しよう。

- (175) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 10v.

- (176) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 40v-41r.

- (177) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 6v. 偽造問題に関連した一〇一六年九月／一六〇七年十二月一六〇八年一月における通貨換算率の公定の布告について *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 277v-278v に詳述がある°.

- (178) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 11r.

- (179) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fols. 18v-19r.

- (180) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 269r-270r.

- (181) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fols. 40r, 43v-44r を参照°.

- (182) Al-Bakrī, *Kashf al-kurba fī ruf' al-ṭulab*, edited by 'Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān 'Abd al-Raḥīm, *al-Majalla al-Ta'rikhiyya al-Misriyya*, vol. 23 (1976), pp. 291-384; Al-Burullūsī, *Bulugh al-'Arab bi-ruf' al-ṭulab*, edited by 'Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān 'Abd al-Raḥīm, *al-Majalla al-Ta'rikhiyya al-Misriyya*, vol. 24 (1977), pp. 267-340.